

西朋

21

1981.4.~1982.3.

西朋登高会

西朋登高会·会報 西朋 21号

1981.4.~1982.3. 山行報告



奥秩父中津川 小若沢大滝



上越大兜山ジロト沢右俣,Dルンゼを望む



前日光薬師岳～夕日岳 初冬の尾根道



奥秩父大洞川 お聖沢左岸の岩峰





女峰山北面 深沢大滝



奥秩父小森川 丸神の滝







上越 大源太山コブ岩尾根 稜線近し

尋 胡 隱 君

渡 水 復 渡 水  
看 花 還 看 花  
春 風 江 上 道  
不 覺 到 君 家

( 高 啓 )

西 月 21 号 目 次

1981 年 度 山 行 檢 覽 --- 2

同 上 山 行 報 告 --- 4

同 上 會 務 報 告 --- 42

1981.4 ~ 1982.3 山行総覧

山行No	期日	山行名	ハロ-テ
8101	4/11	奥秩父平見城大刀山	森下.
8102	4/25	奥多摩海沢	森下.
8103	4/29	奥秩父熊倉山大血川横岩沢	森下, 中野, 河合, 青谷, 四宮
8104	5/3	上越大皷山 ミツ石尾根左稜	中野, 井汲, 河合, 宮崎, 四宮
	5/4	〃 滝沢一沢, ニノ沢左稜	松本, 青谷, 井汲, 四宮, 中野, 河合, 宮崎
	5/5	〃 ジロ沢ビルゼ右スラブ	森下, 宮崎, 青谷, 四宮, 中野, 井汲.
8105	5/13	大菩薩南嶺滝子山滝子沢右股	森下.
8106	5/23,24	奥秩父中津川重石周辺, 両神山金山沢右股.	森下, 青谷.
8107	5/30,31	東北吾妻連峰滑川大滝沢	森下, *服部 (ユニバック山岳部)
8108	6/7	佐久北相木三滝山周辺	森下.
8109	6/14	奥秩父笛吹川東沢又ク沢	森下, 中野, 井汲, 宍戸, 宮崎.
8110	6/27,28	丹沢早戸川円山木沢	井汲, *北川 (電通大W.V.)
8111	6/30	奥秩父中津川小若沢~相原沢	森下.
8112	7/12	伊豆天城山系滑沢~河津七滝	森下.
8113	7/20	奥多摩川苔山逆川	森下.
8114	7/26	奥秩父大洞川知名倉沢氷谷~手取沢	森下, 河合.
8115	8/1,2	足尾松木沢ジャンダルム周辺	中野, 井汲, 宍戸.
8116	8/9	上越朝日岳湯松曾川抱坂沢	森下, 青谷.
8117	8/9~13	東北朝日連峰見附川オハラ峠沢 〃 朝日川黒俣沢ビルゼ	中野, 井汲, 四宮.
8118	8/11~14	東北朝日連峰祝瓶山東面西ノ沢 〃 荒川毛無沢本谷	森下, 宍戸.
8119	8/16~19	東北朝日連峰根子川入りソウカ沢 〃 柴倉沢 〃 荒川東俣沢右俣-左俣 〃 朝日川朝日俣沢下岩釜上沢	青谷, 宮崎, 遠藤(彰), 松本, 松本, 青谷 遠藤(彰), 宮崎
8120	8/28,29	上信越苗場山北面釜川右俣横沢左俣	松本, 青谷.

山行No	期日	山行名	ハローティ
8121	9/6	上越'金城山北面水無川(中込)	森下.
8122	9/9.20	上信越'苗場山西面栃川曲リ沢	森下.
8123	10/10.11	上越'大兜山ジロト沢右俣	森下.青谷
8124	10/10.11	ニ子山RCT	井汲.穴戸.
8125	10/31 11/1	奥秩父瑞牆山カンマソロン中央洞穴ル ッ 大ヤスリ岩 ハイビーク.ルト	青谷.井汲
8126	11/8	西上州'大ナガシ北面赤岩沢	森下.中野
8127	12/13	前日光'大芦川ヒキガタ沢~本沢	森下.松本.青谷.穴戸
8128	12/30-1/1	喜日光'女峰山 鬼怒川深沢	森下.穴戸.
8129	1/10	御坂'十二ヶ岳南面三沢	森下.青谷.
8130	1/15-17	東北'吾妻連峰 スキーツアー	青谷.その他1名
8131	1/16 1/17	奥秩父'滝川豆焼沢支流トガク沢 ッ 大洞川支流 お聖沢	中尾.中野 森下.中野
8132	1/24	西上州'日暮山	森下.*服部(ユニバク山遊歩)
8133	2/6.7	上越'大源太山東面コブ岩尾根(中込)	森下.青谷.*服部
8134	2/14	奥秩父'小森川丸神の滝 周辺	森下.宮崎.
8135	2/28	上越'大兜山 芋川ジロト沢 周辺	森下.*服部(ユニバク山遊歩)
8136	3/2-14	頸城'両鉢山南麓~大渚山	松本.青谷.
8137	3/22	上越'大源太山 コブ岩尾根.	森下.青谷.
8138	3/28	西上州'大塩沢川源流~毛無岩	森下.

1981.4 ~ 1982.3

山行記録

1981年度役員

会長	上原野	清
CL	森下	道夫
SL	中野	敏彦
〃	井汲	重弘
例会	宮崎	岸一
会計	中村	正俊
〃	穴戸	泰成
会報	高谷	知己
西島	松本	哲郎



8101

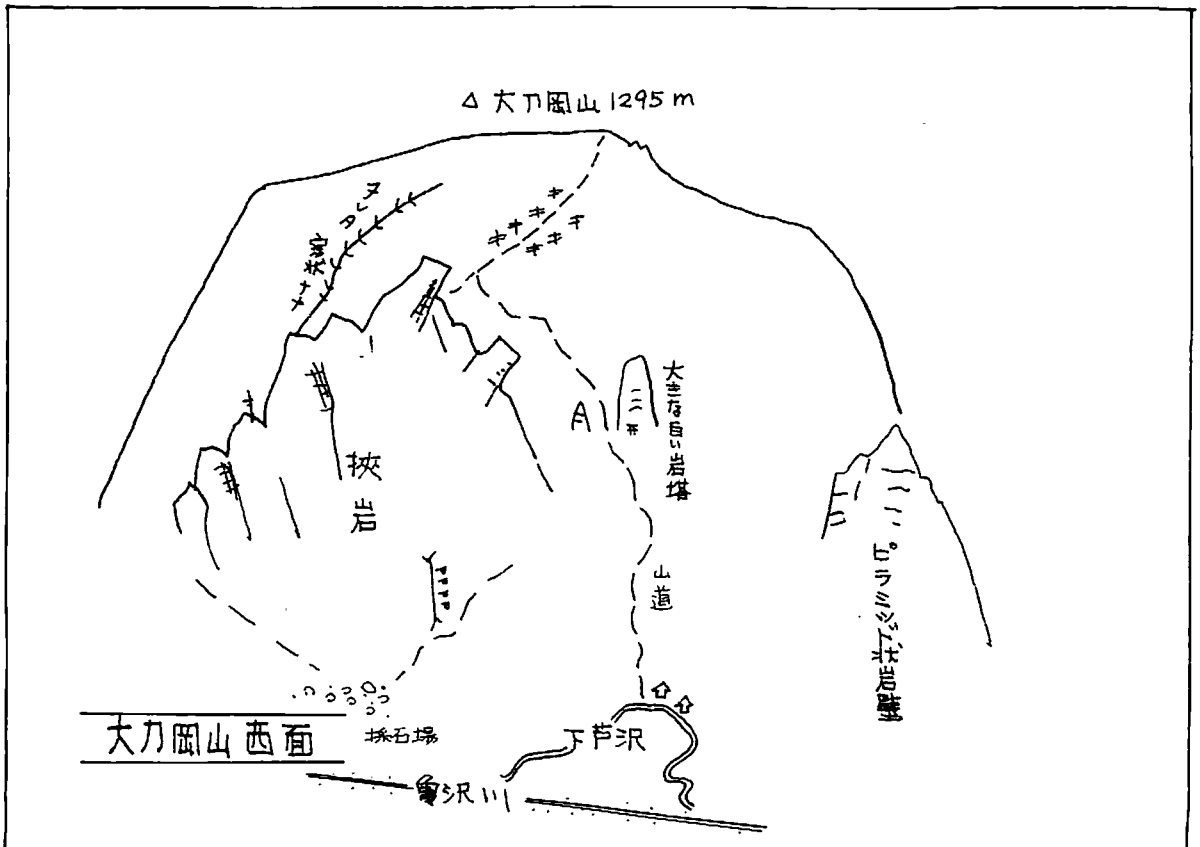
奥秩父・平見城大刀岡山

- 1981年4月11日(晴)
- 森下道夫

勝沼の廻り、ぬけるような蒼空の下に、自垂の南アルプス産山峰がずらりとあった。目の裏に焼きつく眺めだった。甲府のバスタミナルより早朝のバスは、火山地特有のゆったりとした丘陵地帯を、しごくのんびりと登っていく。宮沢橋であり、下芦川ぞいの道を歩みだす。大刀岡山はこの廻りより見ると、ピラミダルの岩峰に見えるが、廻りこまにつれて、そのポリウムある胸帯をみせだし、巨大な墳墓、魚床のようだ。下芦沢の先には挟岩という、きつておとしたような岩壁があり、蟹のハサミのような岩峰が右斜上にユーモラスに、のびている。道あからず、岩壁下の挟

石場より右斜上していくと、一線ポルトラダンのびていた。白く大きな岩塔下で山道に出くわす。小洞あり、この岩塔自体、日本武尊の大刀にみえないこともない。いにしえ、山中に尊の奉納された刀に因んで大刀置山といっただのが、大刀岡山になったとの事だそうだが、ちょっと緊張して挟岩の上に出ると、山上、4月の風はこころよい。大刀岡の頂きまでは、樹林帯のちょっとした登りである。荒川にはダムがでまるらしく、国近、入力いたる所及び、ぶいかえると、場ちがいのゴルフ場の裏に高く、甲斐駒があった。

駅で買いこんできた、ワイン一本あけて、4月の陽気にのびてしまい、芋ヶ岳までの馬蹄形の縦走を放棄した。



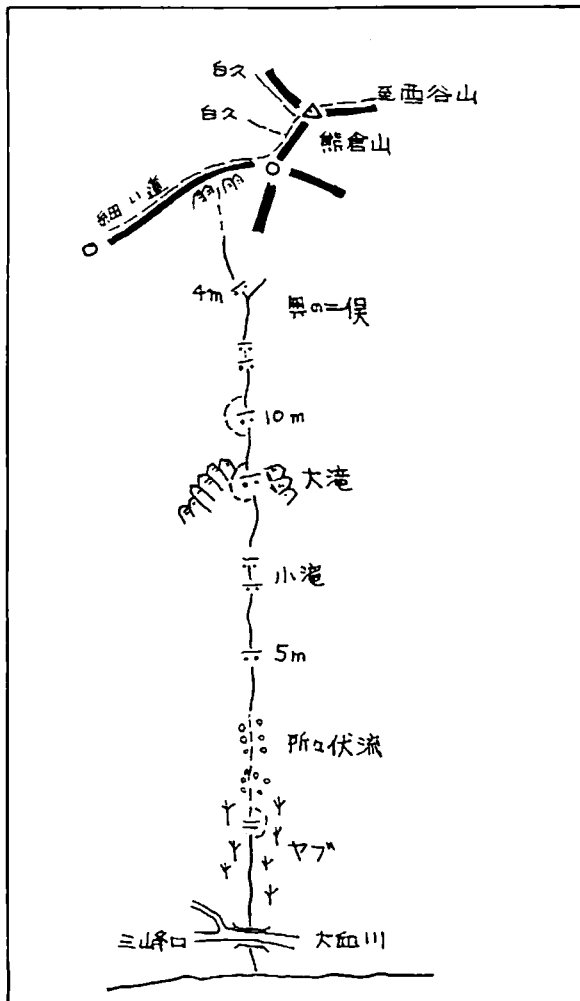
8102

## 奥多摩 海沢

- 1981年4月25日
- 森下道夫

早春の1日、のんびり沢歩きをしようと、海沢にでかけた。雨がふったり、やんだりのあいにくの天気であったが、静かな沢歩きができた。

下流の廊下は、なかなか楽しい所で、そして、林道などきにならなかつた。左岸に入る天狗滝は、すざりしたトイ状の滝で、なかなかのものだ。上流の滝場に入り、上部の山菜畑より篠竹雨に、とて返す。養魚所には、にじますが群れとなつたかわぶれ、一時の雨を楽しんでいるようだった。



8103

## 奥秩父 熊倉山大血川横岩沢

- 1981年4月29日
- 森下道夫、中野敏彦、河合秀樹、  
斎藤健志、四宮健三

出合付近はボヤがかぶっていて、水量も乏しい。しばらくは漕がしい滝もなく、また所々伏流となっている。出合から40分程で、最初の滝(5m)に出合う。これを簡単に越え、さらに2,3の小滝を越えると、ゴ-ゴ-という音と共に、大滝の下に出る。この滝は上部がハンゲ状となっていて、直登は難しいと思われる。右壁、左壁とも、この沢の名の由来を思わせるような、大岩壁で、この左壁の中央部4mニ-状の所をルートにとる。1P目の中ほどの所は岩が少し張り出し、ホールドも細かく苦労するが、中野がトップでぬけテラスに出る。このテラスを左上してバンドに出る。ここには昔、杖道があつたらしく、ワイヤが残っている。このバンドを右にトラバースして、落口上部に出る。しばらくいくと、10m程の滝に出る。直登は左から流れを狭り落口の右に出ると思われるが、我々は左より高捲く。水流が細くなると奥の二俣となる。出合に4m程の滝をかけている左俣に選む。この滝の岩はもろいが右から簡単にぬける。しばらく行くと流れは消え、斜面を直上して稜線にぬける。稜線を右上して熊倉山に登り、七ヶ滝コースより白久に下山。(河合記)

横岩沢出合 7:30 ~ 8:43 大滝下 9:20  
~ 上 11:52 ~ 奥二俣 13:23 ~ 14:36  
熊倉山 14:57 ~ 白久 16:57

彦  
四  
三  
里  
沿  
ス  
の  
ノ  
重  
大  
ス  
豊  
埋  
ホ  
ジ  
時  
ま  
つ  
驚  
カ  
あ  
な  
を  
た  
寂  
向  
沢  
な  
に  
地  
は  
視  
す。

8104

上越・大兜山・北面

- ・1981年5月3日～5日
- ・森下道夫、松本哲郎、青谷知己、中野敏彦、井汲重弘、河合秀樹、宮崎謙一、四宮健三。

5月3日（晴後雨）

落合 9:55 ~ 稜線 12:45 ~ 15:20 ② 7 16:00  
~ 重松越路 16:55 ~ 落合 19:20

- ・三ツ石尾根左稜  
(中野、井汲、河合、宮崎、四宮)

野中でバスを降り、融雪で水量の多い茅川沿いに進む。滝沢とジロト沢の二に、バスを置く。この辺り、釣人が入っており、尺もの岩魚を釣りあげていた。

大兜山北面、ジロト沢の樹冠を掴むべく、重松越路から左稜をたどり、ジロトの頭、~大兜山~北東尾根下降という、パラマコースの予定ど、晴天の下、出発した。残雪が豊富で、落合の少し先から、ジロト沢は雪で埋まっていた。残雪のため、越路への踏跡は、わからず、尾根沿いに、稜線をめざす。途中、ジロト沢左岸のスラブ帯の眺めに、しばし、時間を費す。なかなか、見事なスラブだ。まだ、上部一帯には、不安定に雪が残っている。特に本流右俣の水量の大きさは、驚く。まるで雪崩の様に落ちている。

稜線に出た頃、次第に雲行きが、あやしくなる。ガスがかかり、展望もきかなくなる。かすかな、踏跡の残るやせた稜線を、グッシュ、雪稜とたどり、大兜山をめざした。視界は20~30m位になり、右側から豪瀑の音だけが聞こえる。雪稜を進むが、広い尾根に出て、ルートをまちがえた。小は石沢を右に渡り、対面の小高い尾根を登らなければならなかったのに、真っすぐの尾根にルートをとってしまった。ピークにでるが、地図に照らしてみても、どうも大兜山ではなく、南東にあるピークであると判明。視界もきかず、雨の中、時間もないので、引き返す。地図はよく見ておくべきことを痛感し

た。下りは、重松越路から、かすかな踏跡をたどり、真暗になってから、落合に着く。雨の中、グッシュグッシュと、目にする。

5月4日（曇のち晴）

- ・滝沢一の沢（松本、青谷、井汲、四宮）
- ・二の沢（中野、河合、宮崎）

松本、青谷が入山する。当初の予定では、ジロト沢へ入る事になっていたが、昨日の失敗もあり、森下を待つことにし、本日は滝沢行とする。滝沢側もほとんど雪に埋まっている。中俣と右俣の出会いに野中の大滝55mがある。千前のブッシュから高捲くが、人数が多いため、アンザイレンすると時間がかかる。少し行くと、左岸からスラブの一の沢に出合う。右側のブッシュから取付く一の沢隊と別れ、我々はさらに二の沢をめざして、中俣を進む。技沢からのテブリを身につけて、面白そうな沢を探して登る。結局、二の沢の左側のリッジにアンザイレンして取付いた。容易なリッジで3P登ると、雪稜となり、あとは好天の下、稜線めざして登る。一の沢隊とコールをかわし、大割山をまき、二又めざして尾根沿いに下った。一の沢も3P程で雪稜となったようだ。

夜は、図鑑片手に、種々の山菜を、天ぷらでおいしくいただく。大兜山の春を、コゴミの天ぷらに味わう。

(以上、中野予記)

5月5日（晴）

- ・ジロト沢ビルゼ右スラブ  
(青谷=四宮、森下=宮崎、中野=井汲)

取付 9:30 ~ 右スラブ ~ 11:30 終り 12:45  
~ タキ沢左俣 ~ 帰集 13:45

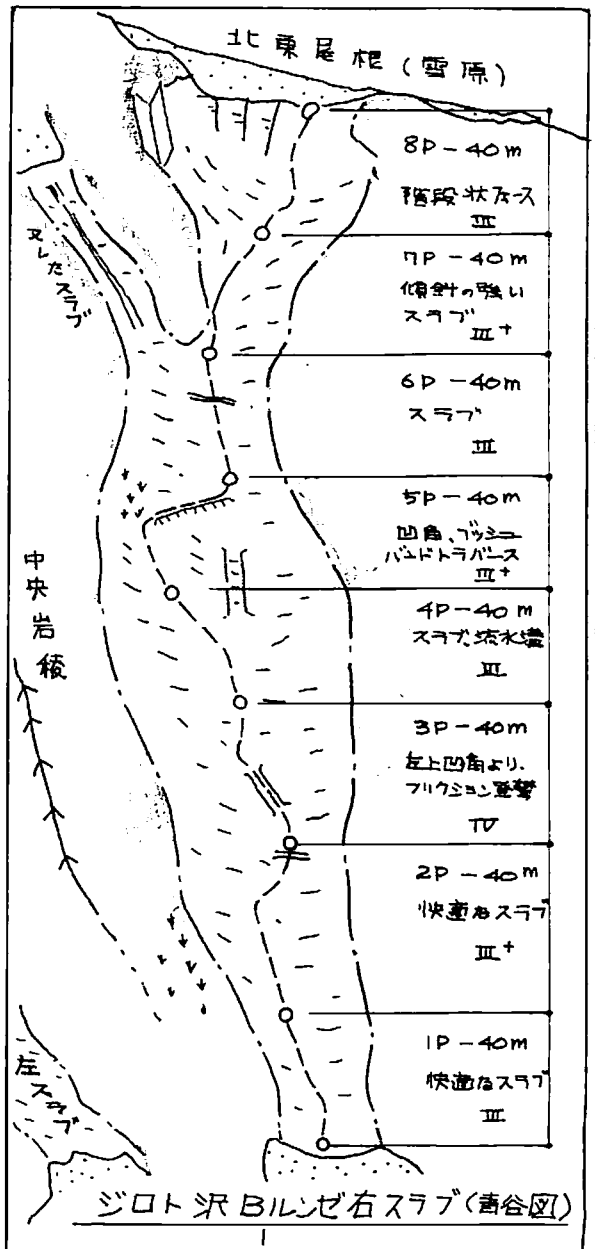
ジロト沢スラブ群羊の中で、ブロック崩壊のたいてい、大膽なルートはと見れば、誰の目にもビルゼ右スラブになってしまう。分散をとりやめ、皆でこのルートに取り付く。河合の首領が悪く、松本がつきそい

戻る。1P. 快的なスラブ。豊富なホールドを、拾いっかけ登る。スリ3りの岩の感触運動靴がピタッと決まる。2, 3P 斬いた快的なスラブが続く。フック状のホールドを頼りにフリクション登攀。4P 流水溝の凹角を左上。四宮にとっては、初めての岩登り。こっちが飛ぼすので、必死になってついてくる。5P 直上はかなりシビアなほど左のブッシュをめぐり、ゼーをとりて一息。花崗岩に走る。岩脈伝いにスラブ中央へ大きくトラバース。要所に、ブッシュがあり、ゼーに有効である。6P. なおも快的なスラブを直上する。左手上部雪面より流下するスラブを見送り、上部に広がる、氷壁帯に入る。7P. やや赤焼けした花崗岩のスラブ。やや傾斜が増すが、快的なことには変わらない。岩肌には、年輪を感じさせる。豊富なしわがある。眼下には、後継のパーティが小さく見え、天気は快晴、楽しいここに極まれりという所。篠宮にほら下を見てみるよ、気持ちいいだろう、と言ったら、「こんな絶壁、こわくてうしろが向けない」と、のたもつた。8P. あと2P ぐらいいかかると思っていたけれど、階段状フェイスを40mほど稜線のブッシュ帯に突入。稜線上の雪原に出てザイルを解く。後継の中野、森下両パーティを待って、滝沢左俣に向けてかけ下る。途中の大滝もうまくブッシュ伝いに下ることが出来た。とどの時、ブロック雪崩。やはり、今の時期の谷下りは、冷汗ものだ。落合附近でカモシカに2度目の対面。毛ヅヤもよく元気いけはい。人に荒らされていらい、大兜の山懐に、こころよく抱かされた1日であった。(青谷記)

◇ 残雪期のジロト決は、もっと登られてよい所だ。アプローチが、ほぼ雪に埋まり無雪期のあのはん雑さは、ない。A1ルゼ手前の滝もほぼうずまり、扇形にスラブ帯がはじまると、各スラブ取付までは、下部ルゼ状の骨のある登りは、省略され、いきなりスラブ登りから始まる。左俣は下部の

大滝、略策点上の大滝が露出してあり、石俣は上部にブロックがひかえ、むかぬだろう。B1ルゼ附近、左スラブには、上部横断バンドに、まっくらブロックが鎮座しており、今でもみあわせて登るしかない。右スラブは、斬いたスラブが続き快的なルートだ。

下山は、キゾウ平より、滝沢左俣をかけ下れる。無雪期のどこをおりるかという、困ってしまう問題も今はまったくない。日帰りで、余裕もって行動できる唯一の時期だろう。(森下記)



8105

## 大菩薩南嶺滝子山 滝子沢右股

- 1981年5月13日
- 森下道夫

初神駅 10:30 ~ 11:30 沢出合 ~ クラック  
 状滝 13:40 ~ 滝子山頂上 14:30

何を勘違いしてか、高尾で接続する列車を立川でおりてしまい、しばらくして気がつきしもらなかつた。初神の駅までたのは、屋近かつた。木馬道をあとに沢に入る。右股に入ると、花崗岩の白い岩が目立ち、あの甲斐駒の弟分といったら、ほめすぎだろうか。大きな滝もあり、クラック状の滝はゲイルをたして登った。上部の急な草付帯をのぼり、白い梅の疎林色のぼると、滝子山頂上。一面、霧あき何も見えなかつた。南東にのびる尾根道を下るが、そここの若葉の緑が目にし、ふと立ち止まるとは、すにまれるような緑の世界だった。

8106

奥秩父中津川重石周辺

両神山金山沢右俣

- 1981年5月23日、24日
- 森下道夫、青谷知己

鉦山下 8:40 ~ 9:30 取付 ~ 中津、木助沢  
 ~ 日室鉦山 14:30 ~ 落合橋 16:15 ~ 両神山  
 18:00 ~ 神社 18:50

久し振りの岩登り、準備万端整えていったが、悪い予感通りIPをやめ、しかし違った意味で、面白い山行であった。

日室鉦山入口より、広河原沢沿いの林道を歩く。ここ一帯に貫入した、石英内結晶の岩肌が期待をふくらませてくれる。南天山の特異な山容と対峙する重石は、かなりのスケールで岩肌を露出する。左稜線は鋭い岩稜となって伸びあが

っている。その末端は複雑な地形をなし、取付の選択がむずかしい。とりあえず、左稜線めざし、押出のガレ沢を進む。小滝を越えたあたりより、ブッシュ帯を左上にトラバースし岩窟を右上していくと、松の木のある小テラス。1P目に取付く。所々のブッシュを頼りに40mクラックぞいに登る。2P 細いホールドをひらいて5m直上、しかし傾斜強いフェースでぶん切りがつかずとりやめ。岩質も石英閃緑岩とは違い、ホルンフェルス化した堆積岩のようだ。とにかく、人の角虫でない壁だけに、心構えが足りなかつたわけだ。懸垂で下り、とりあえず、先程のガレ沢を登りつめることにする。1330mPの下に出ると、重石ピークが、予想以上のスケールで険悪な表情を見せている。どちらへの興味はもう捨てて、四圍を見渡すと、檜ヶ岳、南天山、そして盟主両神山が暮晴し。この景色に満足して、木助沢に下る。美しい滑滝が連続して、まとまりを感じさせる沢だ。1時間程で林道に出る。今日、帰るのはやめて両神山に登ることにする。鉦山で会った子供に、「こんにちは」と声をかければ、モライ仲良しだ。買物をして、落合橋まで一語者に歩く。とにかく彼らは、自然の子、動植物の知識は、とてもかろたない。子供たちに、手を振って、金山沢に入浴する。Fは5m程の滑滝、期待を抱かせる。滑気味の河床を行けば、2,3の小滝に出会うが、難なく通過、名前ばかりの滑ハ丁は期待外れ、いつしか水のきれたゴロ沢を左へ左へと進むと、円天尾根に飛び出す。両神山山頂へ10分、暮れようとする奥秩父の山塊が広がり、実にすがすがしがつた。神社にて、まのみきのみま仮泊、少々寒かつた。

5月24日

神社登 4:50 ~ 白井差 6:40 ~  
 6:55 丸神の滝 7:25

日の出とともに、白井差に向けて下山。

鳥の声を聞き、野草に目を向け、昇真ノ滝に出会い…。小森川上流の早朝散歩はやけに気持ちよかった。

小森川右岸の丸神の滝は100m(?)に及ぶ、見事なもので、冬季は素晴らしい氷瀑になるのではないかと期待が持てた。(貴谷言記)

8107  
東北吾妻連峰滑川大滝沢

- ・ 1981年 5月30日、31日
- ・ 森下道夫、\*服部幸吉記(=コバツム雄郎)

5月30日(嵐)

ある写真集でみた、滑川大滝の写真が目の裏にこびりついて、離れず、折よくた登山大系を手引きに、服部を誘って、彼の得意な温泉 and 山登りを行なうことになった。

早朝、上野をたっが昼の列車は少々持ちぶさたであった。まだ季節は5月なので、山の上の方には、少々雪があるかもしれないとたかどくって来たが、福島あたりまでまでみると、下の方にもかなりあるということがあった。

計画の松川に入るべく、米沢でおりるが、案内所で、太平温泉はまだ開いていせんという。せんくを受け、ではあの滑川へと峠駅にとってひき返した。

この日は、寒風が吹きぬれ、手をだしているだけでかじかむ程で、沢登りするなど常人のすることではないように思われた。(東北地方にかなりの冷害をもたらしたようだ。)罵声をあげて、大滝沢のていさつに入り、ここみなどつんで温泉に帰る。あつい湯につかっていると、こういう山登りをしていたいとつくづく思った。

5月31日(晴)

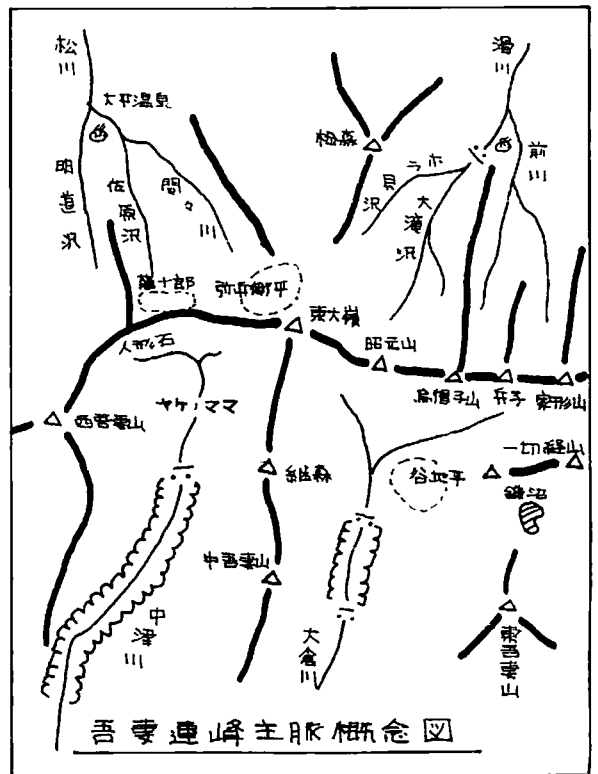
早朝、大滝沢湖行に入る。オノの滝15mは、昨日あまりの水量の多さに断然として右岸まいて失敗し、今日は支沢の滝を落す左岸をなんとか登れた。上には、幅広い川が完璧に滑状となって続いており、オレンジ色の岩床が見透かせ、ところどころ面白く細長

いエメラルドグリーン<sup>①</sup>の淵をつくっている。あくわくしてきた。

やがて、両岸に雪塊を残す、河原になると、滑川の大滝が見えた。おそろしく巨大な滝だ。白布のように高身から滑り落ちる滝なのだが、風圧で滝下まで近よせず、離れて見あぐるのみ。あの高身より、一滴の水はどのくらいかかって、下まで滑り落ちてくるのだらう。いつか登ってみたいと思うが、こののっぺりした、巨大な面にルートをさがすのはむずかしい。

巨大な高捲きを行い、カモシカの寝所のような所から、落口におりる。まさしく、川はおちているという感じである。上はメメの意匠をこらした溪相が続く。3m程の全河瀑布など細いホールドをたよりに、水をあびながらひきつるように登る。これは芸術だ<sup>②</sup>とキザなセリフの一言や二言、ほごまたくなるほど、ナメに危感されつくしたころ、上部に吊橋がかかり、鉱山跡に出る。

雪にうすもれた沢をいくと、直瀑の滝滝がかけり、ゴルジュ<sup>③</sup>となる。まことに、きまりよく、1風呂浴びるのによい。帰り時間とをせとと温泉への道を引き返した。





8108

佐久北相木三滝山周辺

- 1981年6月7日
- 森下道夫

その昔、秩父事件、最後の光芒を放った。この翌日、今日、千曲川ゆるやかに流れ、麓の高みに、白くハ岳があった。小海より、一人バスの乗客となって、北相木山口まで行く。深沢は、名前からくるイタジはなく、所々小滝かまえた、小さな幽幻な沢である。途中、右岸の岩陰に、十一面観世音、不動尊がまつられており、聖の空間をつくっている。谷口とこより、村の生活を、あたたかく見守ってきたのだらう。三滝は、大滝、中滝、浅間の滝よりなり、厳冬には松笠状の大氷柱となって、

見事なとらだ。かたわらに、大樟坊、太心行者になる虫齋ある。曹洞宗、三滝山深沢庵がある。沢沿いの道はずし、三等三角点、1629.7mに登る。三滝山は、庵の山号を呼ぶもので、特定の山をさすものではないようだ。航空標色ある頂まきり、安、幹線、鉄塔まで、町、村さかいの稜線をたどり、親沢へと下りる。そここに、ワラビがのの字をえがき、中がねむそうであった。

8109

奥秩父雷吹川東沢又沢左俣

- 1981年6月14日
- 森下道夫、中野敏彦、井汲重弘、穴戸泰成、国崎洋一

前日からの雨で、3100円で別々の沢に入る予定を変更し、全員で又沢に入ることにする。1P登山道を歩いた所で、沢を横切り、そこから溯行開始する。どこかの策から、はぐれた、子鳥が雨にぬれをぼれあわめだつた。大滝までは、別にたいしたことはなく、2.3mの滝がいくつかあるだけだ。大滝は下段100mは右側を登るが、ホールド・スタンスがはまりして、どこでも登れそうだった。中段80mも右側を登る。上段80mは、上部左壁を登ったが、思ったよりホールドなく、その上水をかぶり、音をたかみだりて、意外にすこすった。(井汲)

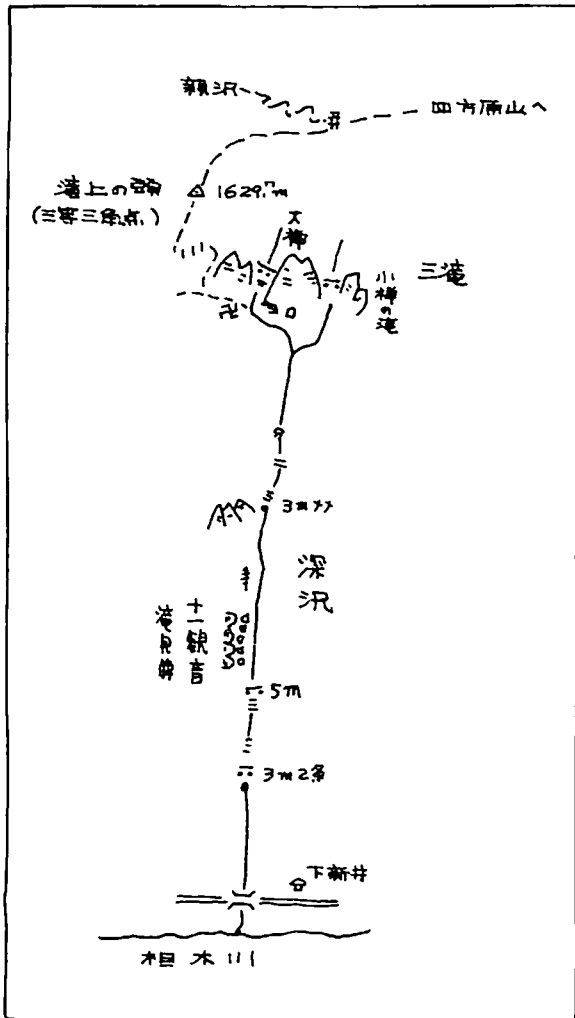
8110

丹沢早戸川円山木沢

- 1981年6月27日、28日
- 井汲重弘、\*北川(電通大W.V部)

北川が沢登り初めてのため、まず丹沢で、その中でも、静かな溯行を求め、早戸川流域を選んだ。前日、夜の林道を3時間、出合近くに暮営。

出合は林道が終ると、対岸に大岩が見えた所である。出合付近は倒木などで、ま



わく  
と、  
滝  
の  
見  
あ  
ら  
う。  
た。  
よ  
ち  
を  
防  
び  
る  
ナ  
カ  
滝  
ま  
り  
と  
山  
出

たないが、しばらく行くとF<sub>2</sub>(30m)が前をさ  
えざる。右壁を登るが、上部5mまでは階  
段状でスイスイ登る。上部はホールドがなく  
フリクションに頼り、以外に手ごわい。水流近  
くに「イヤーロープ」があるが、古いのであまり頼  
れない。F<sub>3</sub>(7m)は左の山でから巻いたが、  
そのすぐの、F<sub>7</sub>(20m)、ナメ滝(30×50m)は、  
いい練習になり、結構楽しめたようだ。アプ  
ローチが10km以上と長いので、人が少なく、丹  
沢でもこんな静かな所があるのかと感じし  
た。車で行き、別の沢を下降すると案外、  
より楽しめそうだった。(井汲記)

8111

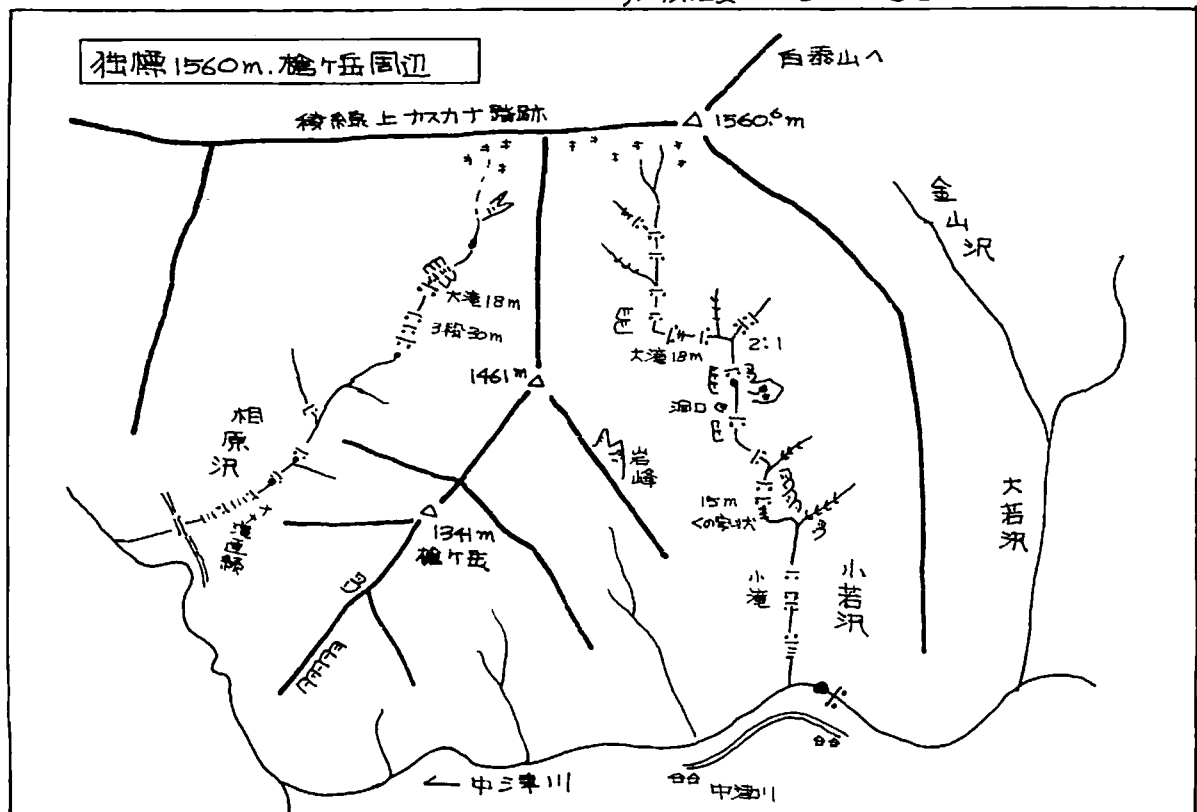
奥秩父中津川小若沢～相原沢

・1981年 6月30日

・森下道夫、

小若沢出合 8:15 ~ 2段 9:00 ~ 上の2段  
9:30 ~ 10:45 橋線 11:00 ~ 相原沢下降  
~ 13:50 出合、

小若沢は、中津川の流に、一握りの水を入  
れる。堰堤、伏流帯を行く。やがて兩岸、相せ  
ばまり、まねいた岩相の5mの滝を2つ続けると  
くの字状、15mのナメ滝があらわれる。7エルト  
底をまわして登る。沢は屈曲をくり返し、河  
原状となる。右岸に、昔の洞窟(金山?)  
が見え、左岸には、人の顔にみえないこともない  
大岩のしかがたづく。笠をもったトイ状の  
滝をのぼり、2段となる。右沢は10m程の  
ナメ滝を2つ続け、本流左沢は、2段のナ  
メ滝を越えると、20m程の、奥秩父然りと  
いったナメの大滝となる。上部は、小滝群  
が続き、背後に、支稜の顕著な岩峰が望  
める。右岸より、3本支沢を入ると、鬱蒼  
と木のしげった源流帯となり、橋線にでる。  
橋線上、所々あるかすかな踏跡(1/25000  
地形図には、山道が記入されている。)をたどり、  
相原沢の源頭より、沢へと下降する。沢  
は、上部に20m程の黒いナメ滝をもち、相原沢  
の大滝といえるだろう。中流部は5m程の滝  
をいくつももち、下流のナメ滝となる。この辺りは  
野鳥の森として指定されており、てあつく自然  
が保護されている。



8112

伊豆天城山系狩野川滑沢~河津七滝

・1981年7月12日

・森下道夫

前日、戸田でたんまりと、塩辛い水を飲み、今日は少し塩ヌキしようと思った。あの入山の、滑沢の滝を登る蛮気は、自分にたく、両脇に遊歩道ある。滑沢を渡る。オバケのような、太郎杉がニョキりと立ち、総ナメ滝10mは、サササと白布になる。山藁田は、緑々と水の中に息し、滑沢峠までつく。

旧天城峠、幕末の志士が越えた峠。今日、タヌキが、草むらよりのそっとあらわれ、むけたカマラをみて、あわてて逃げだしていた。下り路各、追いかけてこした野鹿をつかまえると、彼女は、すっとんきょうな声をだした。

売店たち並ぶ、河津七滝、かけぬけていく車、そして巨大な、1-7°橋に、めまいめまいじや。

8114

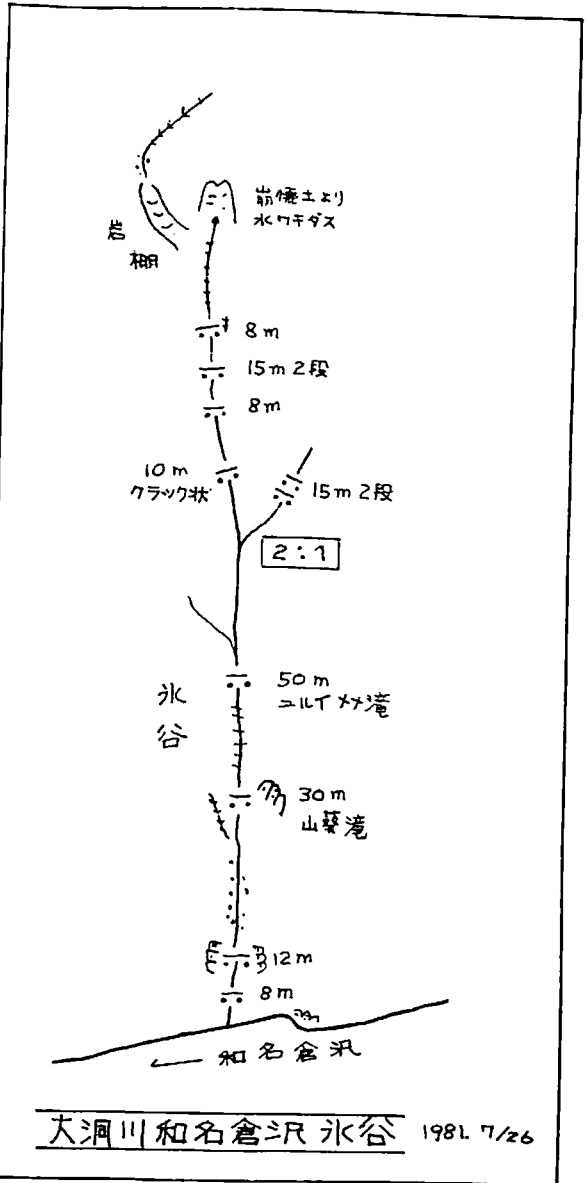
奥秩父大洞川和名倉沢氷谷の手取沢

・1981年7月26日

・森下道夫、河合秀樹

和名倉沢出合8:20 ~ 氷谷出合10:00  
~ 水流ワキダシ12:00 ~ 手取沢源流12:40  
~ 手取沢出合16:10

ボリュウムある、ふくよかな山容の和名倉山に、和名倉沢は、広く深いきれこみを入れている。豊富な水流をもつ沢を渡る。日は照りかえし、白い海礫の河原は、のんびりと、気持ちのよい所だ。三階滝の上で氷谷は右岸より入る。出合の優美なスグシ状の滝をのぼり、続く滝は中段まで登り左側をまく。しばらく、ゴ-ロ帯がつづき、大きな30m程の山藁滝となる。右岸の窪を登る。上には、黒い横に無数のしわをもつ、ナメ滝が



大洞川和名倉沢氷谷 1981.7/26

走り、落口は、顔に水を、まともに浴びながら、ぬける。二段となり、右沢は、15m程の黒い垂直の滝が見える。本流の左沢は、運湯帯となり、8mクラック状の滝は右壁、2段の滝はシャワーライミング、最後の棚は、右の岩溝と、少々、息がとれる、明るくひらけ、楽しい所だ。水量の少なくなったナメとあつと、崩壊土壁より2条となって水のおまです。地点につく。右岸にある岩棚をまたわり、左岸のガレ沢を登って行く。適当な所より、みせりをつけて、右岸の樹林帯におけ入り、獣道トラバースし、緩慢な、

尾根を乗り越え、手取沢源流へと入る。手取沢は上流に、10m程の滝を3つかけ、中流はこけむした流れとなる。右岸に岩場を見いだすようになると、沢は緊迫した美相をみせだし、滝、ナメと連続してかかる。所々、山仕事の「マイヤ」もみえる。原全教「奥秩父」の「全沢類と急な滑の連続である」とは、この部分より、おしはかったものと思われる。大洞川出合に4時10分着。大洞川はとうとうたまりの流木であった。(森下記)

よくきき、楽しめた。(井汲記)

8115

足尾松木沢ジャンダルム

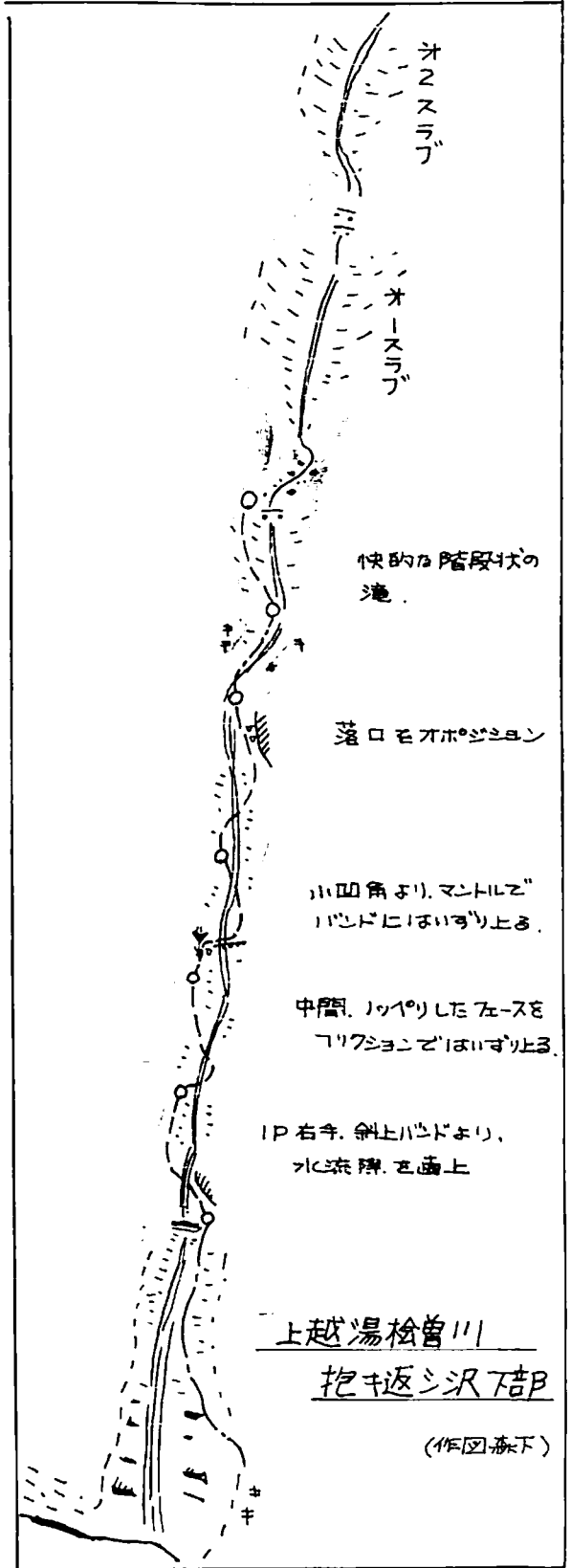
- 1981年 8月1日、2日
- 中野敏彦、井汲重弘、穴戸泰成

8月1日 左ランペルト

取付は中央ルゼより左5m程のクラック。これを5mほど直上すると、そのまま直上する左ルートと分れ、右側がかぶっている、凹角状を左上する。この上もかぶりざみで結構、苦労した。ランペをまわりこむと、ジュードルになる。左側のカンテを登りIPで、オヨバンド。その上は、何本ものクラックが縦に走っており、正面のクラックを登ることにする。上部44ニーは、数少ない枯木をつかんだりして越える。クラック口はナツツが、よくきく。下降は右ルゼ。

8月2日 右ルート

取付は、中央ルゼ右側のカンテ。最初のズPは、階段上で楽に登れる。その後、右手の壁をまわりこむとバンドに出る。正面右よりの凸角を登ると、左に44ニー、右のクラックを登る。次のピッチは乗だが、最終ピッチで、上部に大きな、チョックストーンをもつ、見事な44ニーが現れる。入口で少し手こずったが、その上はバックアンドニーで登り、チョックストーンの上は、ワマガ小さいため、ザックをザイルに絡んで後から引き上げる。44ニーを越えるとあと少し登り終了。44ニー、クラック等肉面登攀が多く、ナツツ類も



8116

## 上越朝日岳湯槍曾川抱返し沢

- 1981年 8月9日
- 森下道夫、青谷知己、

おぼけ勝ちの身体。おまねさいと、魚止の滝、遠い足場をまさぐって、おもいきり足をあげて登る。美しい淵が続き、青白な岩棚をつたわって行く。今年は残雪多く、ウチヤ淵手前より、雪渓の下の洞道をまぐって行く。淵のいきどまり、右岸のちょっとした空間をめざして、棚をはいり上ると、十字山まで少しだった。抱返し沢は、十字山頂の正面に大滝と成って、おちこんでいる。下部の胸壁帯さまき、途中より階段状のストラップを登っていくと、細長い釜をもった、へりに落ちる。これより、連瀑帯となり、ザイルをだし、水流際を直上して行く。1P目、右岸の左上するバンドより、水流際を直上するが、てだしはぶんばりが必要だ。2P、3Pと7リクシオンをきかしてシマウグアイミング、4P目、小凹角よりマントルでバンドに、はいり上る。5P、右岸より落口めざしハークをキッて、オボジンシ気味に乗越す。そして最後の棚を快楽に登ると、下部の滝場は終り、オスラップとなる。登れぬ滝場、オスラップと続き、なめるようにストラップを遠く登る。

下部、中流と川の大きな滝のような、この沢も、上部は広い笹原を蛇行する沢となり、やがて広い草原帯に消える。エテルグイスの一種、ホリバナヒナウスユキソウが咲きみだれ、可憐だ。ヤブと草原が交互にあらわれる尾根をたどり、朝日岳頂上。

(土合 4:50 ~ 抱返し沢 出合 8:00 ~ )  
(朝日岳 14:00 ~ 白毛門 16:00 ~ 土合 17:30)



## 夏合宿 東北、朝日連山峯

— 係 森下道夫 —

- 8/9 ~ 8/13、<sup>△</sup>中野、井汲、四宮  
見附川 オハラナキ沢、黒俣川、白川
- 8/11 ~ 8/14 <sup>△</sup>森下、穴戸  
祝瓶山西沢、荒川毛無沢
- 8/16 ~ 19<sup>△</sup> 青谷、遠藤(彰)、松本、宮崎  
根子川入りソウカ沢、紫倉沢  
荒川東俣沢右俣、左俣、朝日川<sup>下</sup>岩魚止沢

今年の夏合宿は、会として、業々性のある、まとまりのある合宿といたく、幾つかの候補地があがたがまったくの、未知をもって誘う、東北朝日連峰で行なうことになった。

計画段階で各自の日程がおりあわず、分散集中とし、3パーティ9人の参加があた。今回は、各パーティとも短期間の日数しかとせず、比較的アプローチを短く、短期間で後編にできる、朝日連峰主脈南部、大朝日岳周辺で行なった。水系としては、東面、見附川、根子川、朝日川、南面荒川等である。

また、機会があれば、主脈の北部、西面三面川流域にも入ってみたいものだ。各流域の支沢には、未知の沢、ストラップ、岩場も幾多あると思われ、その魅力は、新鮮で、探険的ぶんいきかただよい、我々の旅心をさそうものだ。

8117

## 朝日連山見附川オハラナキ沢

朝日川 黒俣沢、白川

- 1981年 8月9日 ~ 8月14日
- 中野敏彦、井汲重弘、四宮健三、

## 見附川・オバラナキ沢

8月9日(晴)

羽前高松7:05～8:50日暮沢小屋9:20  
～11:50引き返す～登り口14:25～15:10最低  
鞍部15:10～16:45見附川出合17:05～  
17:30幕営

バス、タクシーを乗り継いで、日暮沢小屋まで入る。日暮沢の途中から、最低鞍部を越え、反対側の見附川に降りるアプローチを考えた。

良い天気でも緑がまぶしい中、小ぢんまりした日暮沢を気持ちよく歩いているうちに、コルへ向かわずに、沢沿いに進みすぎてしまった。素直に沢を引返せば早かったのだが、ヤブコギして無駄な時間を費してしまった。コルから見附川へと下りる沢は、多少荒れ気味だが何なく下れる。見附川の出合は10mの滝で、左側のツシュ帯を下る。

間違えさえしなければ、日暮沢小屋から3時間あればこえる所だ。見附から見附川本流沿いに来てもよいだろう。その方が早いのかも知れない。イワナがすぐ目近に見える。見附川が気に入ってしまい、幕営する。しかし、釣れなかった。

8月10日(晴 午後曇一時雨)

昇6:20～6:50オバラナキ沢出合～  
11:15～高巻-12:15～12:30大雪渓取付12:55  
～15:10大雪渓の頭15:25～雪渓下17:30  
～稜線登山道18:55

出合後、すぐに20mの滝があるが、水量も少なく、右壁から容易に越える。ゴルジュの4m滝で、シャーククライムを強いられる。小ぢんまりした感じの景色が続き、順調に進む。途中、オバラナキの岩壁がよく望め、沢の行方を眺めると、稜線まで長い雪渓が続いているのが見えた。どうも残雪が多いようだ。スノーブロックが表われたすと、釜をもち、両側の狭まった5m滝にぞた。両岸とも急な泥壁で、何度か試みたが、越えられそうもなく、少し戻

ってから、左を高巻いた。アブコギの途中、運悪く夕立に会い、ゴシュの中で雨やどりをする。沢に降り立ち、冷風と生暖い風が交互に吹きはじめたと思ったら、大雪渓の末立帯に出た。登山靴に履きかえ雪渓登りになる。途中右側から20m滝が出会う。オバラナキ山峰の岩壁帯に伸びる沢である。ゴルジュではじまるこの沢は、上部岩壁とも、なかなか興味を引かれる。大雪渓の終端部は深く切れこんであり、苦労して5m程ステップカットして右壁側に下降する。アイスハンマーが役に立った。

沢は、ルンゼ状になり、次第に水量も減って、やと源流帯の様を呈してくる。雪融け後の泥まじりの草付に続いて、急な雪渓登りとなる。陽もだいぶ傾いていたため、雪も硬く、不安定でスピードが上らない。雪渓を嫌い、左の岩壁帯へ逃げた。階段状の左スモ、アザインにして2P登り、ハイマツを10mこぐと登山道に出た。

今回は、残雪が多く、大雪渓の下が核心部と思われるため、この沢の全容はよくわからない。オバラナキ山峰岩壁帯も魅力あるところだ。

8月11日(雨)

昇6:55～10:00竜門小屋11:30～  
12:35西朝日岳13:05～傘玉水14:10～  
15:15大朝日小屋。

晴天の下の、稜線漫歩を期待していたのだが、裏切られる。出発後すぐ雨が降りはじめ、今日の行動は傘玉水までとし、休み、休み行く。傘玉水の幕営地では、風雨にくじけるツェルトを惜げなく、思い、小屋泊りとする。

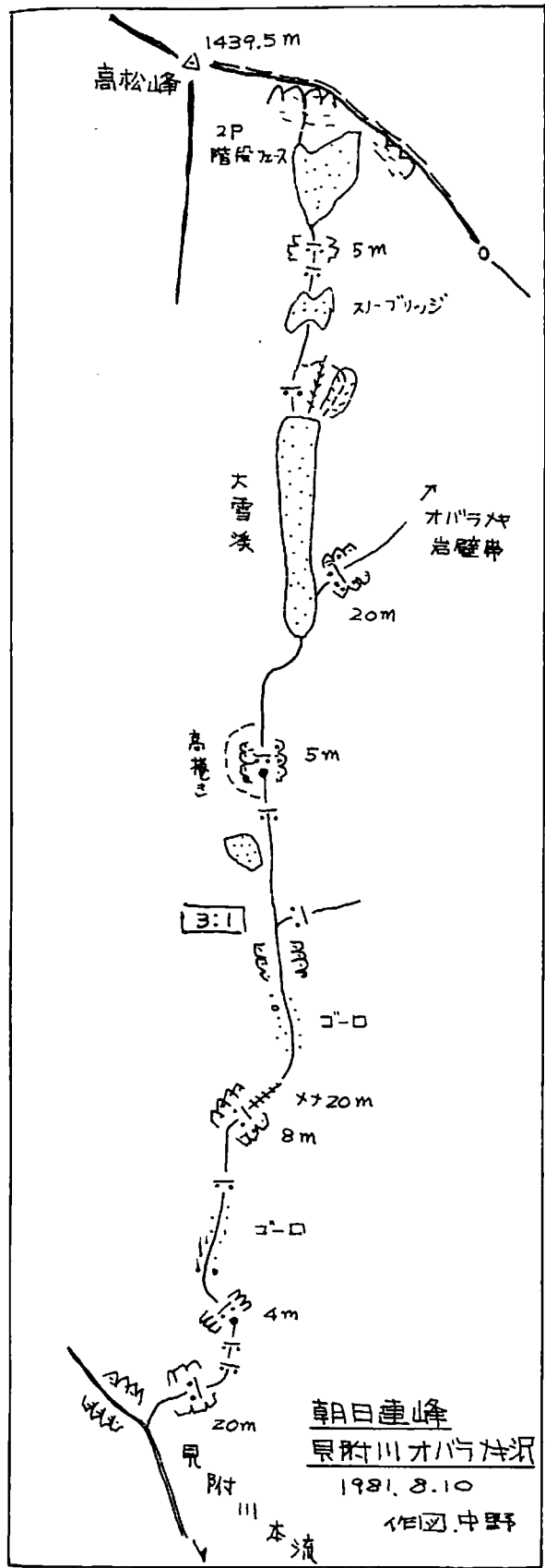
## 荒川・ヒキモッコ沢

8月12日(雨)

昇5:35～沢下降点6:20～8:40  
ヒキモッコ沢下降～12:00引返点～登山道14:10～16:00大朝日小屋

ヒキモッコ沢を下降し、泉俣沢左俣





朔行の予定どであった。小屋の人の話では、荒川にはあまり人は入っていないとのこと。昨日稜線から見た感じでは、残雪が多いようである。天気はほっとしないが、午後には回復すると楽観して出発する。平岩山を越え、ヒノキモッコ沢を下るつもりだったが、少し手前の踏跡にひかれ、幕営地を径て、小さな枝沢を下降した。下りやすい沢だったがヒノキモッコ沢に降りるのに、40mのアプガインを要した。

ヒノキモッコ沢は深くて大きな沢で、やや荒気味だ。昨日、見たとおり、100m位の雪渓がいくつか断続的に残っており、雪渓両端での通過に苦労させられる。このため、時間もく、東俣沢出合にも着けず、天候も回復しないことから、東俣沢朔行は無理と判断し、ヒノキモッコ沢を引返すことにした。〇)メて 干ヤブユギして登山道にのぞく。

帰路、大朝日岳への稜線で、歩くのもままならぬ程の暴風雨に見まれ、連峰の天候の厳しさを思い知った。

(以上、中野言記)

8月13日(晴)

中野、小朝日を17日昼迄に下山

黒俣沢(ビルンゼ) (仮称)

朝、中野と別れ、四宮と共に、ビルンゼを下降する。降口は急で、草につかまりながら慎重に降りる。途中の雪渓では、所々穴があいている上をそと歩いたり、雪のトンネルを緊張して越えたり、スリルがあり、面白。ガンガラ沢本流との二俣に出て、しばらくしてビルンゼ出合へ。出合は、雪に埋っていたが、ちょうど壁にとりつく直前で切れていて、むずかしそうだったので、ビルンゼ取付手前で、左手から7m.8m程の2段の壁で落ちてくるビルンゼ(ビルンゼ)を、ここなら誰も入ったことはないだろうと、登ることにした。

最初の下段は右手からまく。上段は左から取付き、上部は右に少しトラバヌ後直上、かぶり気味で微妙なバランスを

必要とする。四宮はどこで苦勞したようだ。その後、細いなめ狀の滝が続き、所々3~5m程の滝が現われる。上部は急で、木登りをして、3時間ほどで、ビルゼ横の尾根1、やぶこぎ30分後ビルゼへ下降。その後ビルゼ上部から稜線に出る。

大朝日小屋を1で、今回のやぶこぎに始まり、やぶこぎに終った沢登り合宿をぶり返りながら、朝日鉱泉へかけ降りた。(井汲)

8118

朝日連峰祝瓶山東面西ノ沢  
~ 荒川毛無沢本谷

・1981年 8月11日~14日

・森下道夫、宍戸泰成

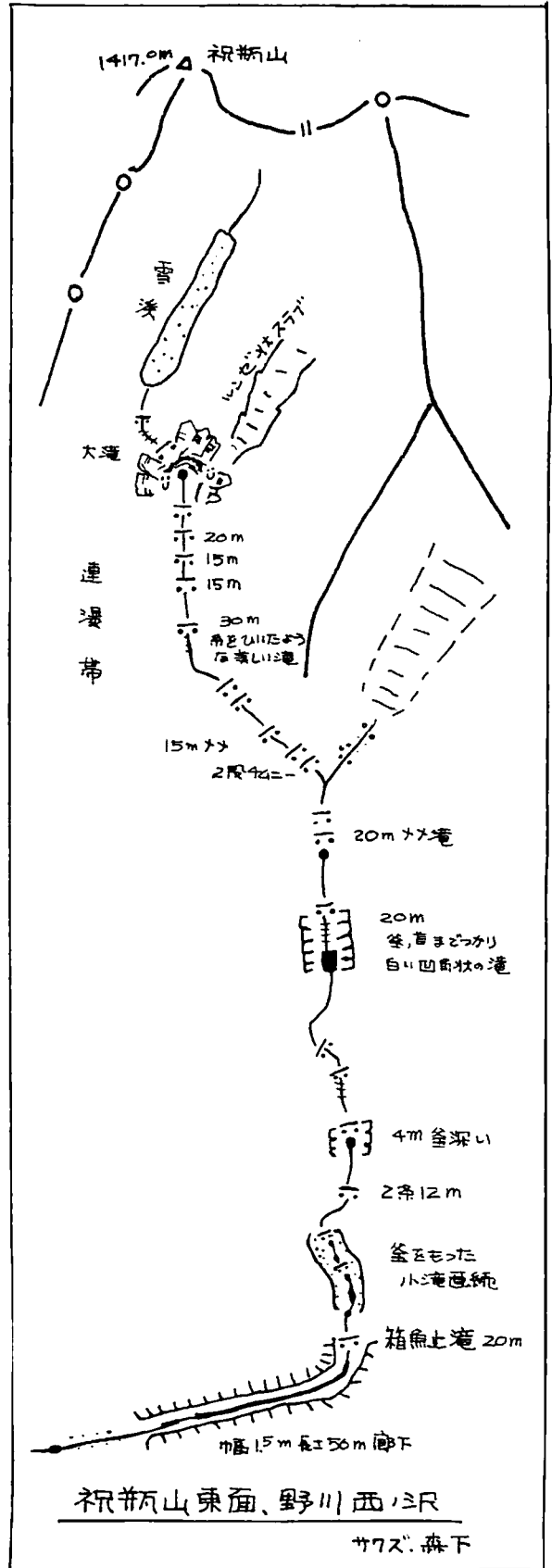
祝瓶山東面、西ノ沢

8月11日(曇後風雨)

日本一という、アヤマの里、長井より祝瓶峠まで、野川ぞいの屈曲の激しい山道を車ぞ入る。木地山ダムの無気味な静けさを前に、祝瓶山が、すくっとピラミダルの端正な姿をみせる。珍らしい名前の山だが、縄文期の尖底土器をふせた感じが、ないでもない。

東面は、かなりの雷蝕地形をみせており、ヲルミ沢はその最たるものだが、その一ノ軒にある西ノ沢も、地形図をひらげてみると、なかなか素晴らしい切れこみを入れており期待がもてた。

桑住沢出合より、溯行を開始すると、箱というにふさわしい淵の際に、箱魚止滝が瀑水をはねたたせている。右岸を捲き、釜の沢身を行くと、2条12mの滝、それとシャワ-フライングをやる。下で足を履くと、登っているときの気持の落差はげしく、ひとまわ水が冷たく感じる。釜をまた、20m程の白い凹角状の滝は、曇天の中、釜の中、首から上をだしていたりきたり、最後気持ちをととのえて、一番勝負で取付きにはいあがる。続く20mナメ滝もまわどく



登り、石にガレ沢を入ると、沢は左折し見事な連瀑帯となる。チョックストン状、ナメ滝と登ると直瀑となり、糸をひいたような30mの滝まで右岸を高巻く。続く棚をアサギにして登るが、3つ目の滝はどうしても落口が越えられず、右の急な華付にガイルをのばす。沢は、いさづまりとなり、高く漏斗のような壁がたつ。沢を徹達して、右の枝尾根のからみつくようなヤブこぎをして尾根道に出る。時間も遅く、風雨も強くなりだし、急いで荒川口に下山。里側に原っぱ小屋の針生小屋に泊る。

### 荒川本流へ毛無沢出合

8月12日 (晴後風雨強し)

荒川本流は、大玉沢出合まで沢治いに登山道があり、そこより沢の溯行となる。大体において、ゆうゆうとした河原状が続き、大湯沢出合附近より瀧、淵が連続する溪相となる。滝沢出合は、奔流うすまき、および膝で、脇のノッペリした岩をフリクシヨンドですり上る。

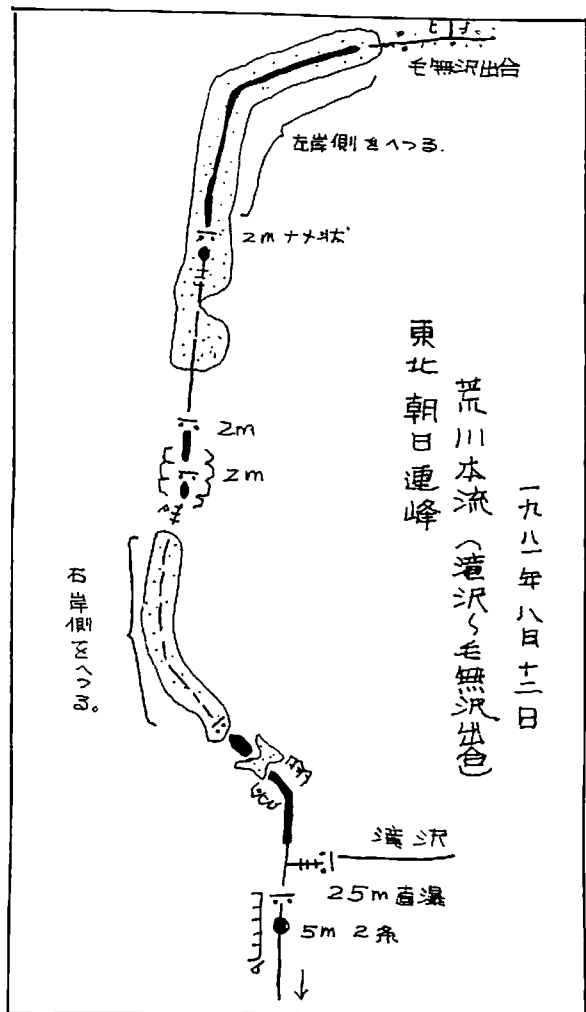
不気味に、青い淵をフカフカと氷片が浮かぶようになり、雪渓が、ふとく。えらく長い、雪渓下の洞道を、ヘッドランプたよりに、入る。見当で、首までつかり、ハフリ泳きもする。右折したをも、地底の川を溯行ると、やつのことで、もやのたちこめる、終端にでる。

毛無沢出合はずぐで、風雨強く、おそろしく陰険な、この谷の出合の様子を見ると、ぬれぬずみの我々は、思わず尿込みしてしまい、目をさむけて、対岸の空地まで、ガイルをだして登り、ビバークとする。雪渓の舌立帯が、おそろしく高く、絞がまばをむいているふうであった。

### 毛無沢本谷へ 金玉水

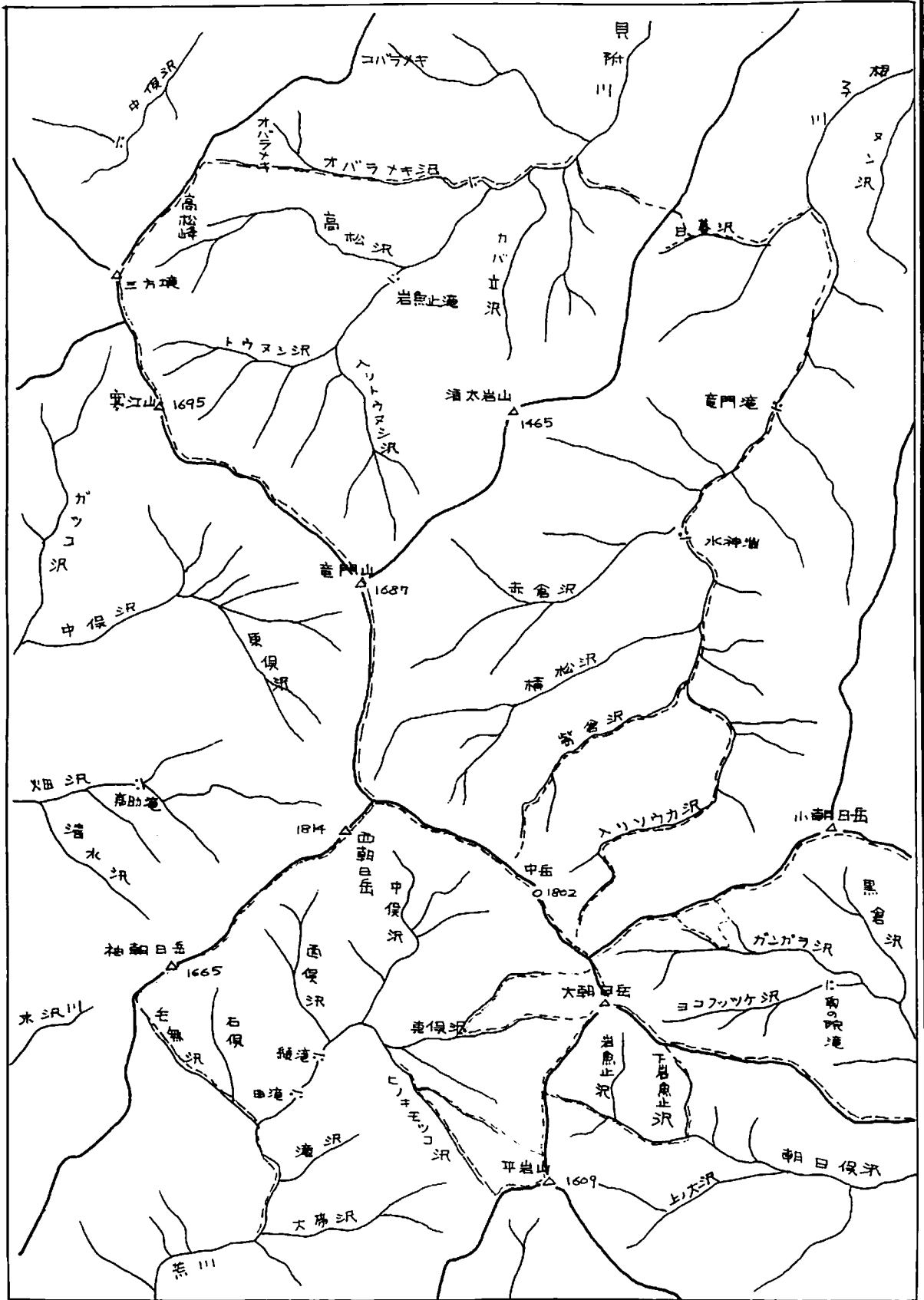
8月13日 (晴)

天気もおさまると、何とか登る気もおいでぎて、出合から左岸をかたりまいて、雪渓の上に降り立つ。今年は残雪多いらしく、本谷はかなり上部まで雪渓がのびている。一ヶ所、雪渓がきえている所は、タツルアツクズで、



つたあり、ほかとる雪渓登りをして行くと、背後に主脈の山並みも姿をあらわしてくる。雪渓の終端は、上の40m程のナメ滝に向かって、へりを高くあげている格好で、末端に雪のこぶをけずりとり、ガイルをかけ、側岸におり立つ。ナメ滝を斜上して登り、10m前後の連続する棚を快適にこえていくと、迷路のような、ブロック散乱か所が2つ続く。15m程の枯木た四角状の滝を、ハーケンを1枚打ってオホシシヨンドで越えると深流の華付帯となる。所々露岩のある所を登っていくと、どこをまちがったか、えらく傾斜のある華付壁となり、青くなって登る。腕はほり、息はきれて、一面ヤブである北朝日頂上にでる。

計画の末沢川下流、策戸々山南面を中止



し。西朝日岳まで、ヤブの尾根をこく。岩井俣川、荒川が克明に望め、素晴らしい展望台だ。所々、草原をひろげ、清らかなヒメサユリがうっせまかげんに咲き出ている。西俣沢源頭では、人気におどろいてカモシカは走りさっていった。

(森下記)

8119

朝日連山 根子川、荒川、朝日俣沢

- ・1981年8月16日 ~ 8日
- ・遠藤彰、松本哲郎、青谷知己、宮崎洋一

### 根子川本流

8月16日

日暮沢小屋 8:40 ~ 9:15 本流 9:35 ~ 11:45

水神淵 12:10 ~ 紫倉沢合流 15:15

山形盆地の田園地帯を左沢線の気動車は、のんびり走る。羽前高松よりバス、間沢より予約のタクシーに乗りついて、日暮沢小屋に入る。せみじぐれの中、林道を40分程たどれば、根子川への下降点となる。溪流タビにはまかせ、朝日の沢に一步を印す。

しばらくは、淡々とした河原を行くが、所折花崗岩の沢床を露出させて、深い釜と小滝があらわれる。ちょっとした、ハツリや高捲まがなかなかに楽しいアクセント。2時間程で、赤倉沢が左岸からゴルジュとなって注ぎ込み、本流は、堂々とした水神淵の大釜によって、進路を断たれる。とりあえず、ここで昼食。眼前の緊迫した様相が期待を抱かせる。水神淵は左岸のブッシュをたよりに、微妙なハツリで抜ける。しばらく開けるが、次のトロは、睥睨まどっかて、構断、次の7m滝は左岸を小さく高捲く。左岸に小にせを落とす地点に降り立つと、倏然、溪相は緊迫し、大釜を持つ2段の滝が行手をほく。直登は全く可能性なく、右岸の踏み跡を高捲く。美しい花崗岩の河床に降り立てば、沢は急に右折する。小滝を越えると、両岸がせまり、小規模ながらも、ゴル

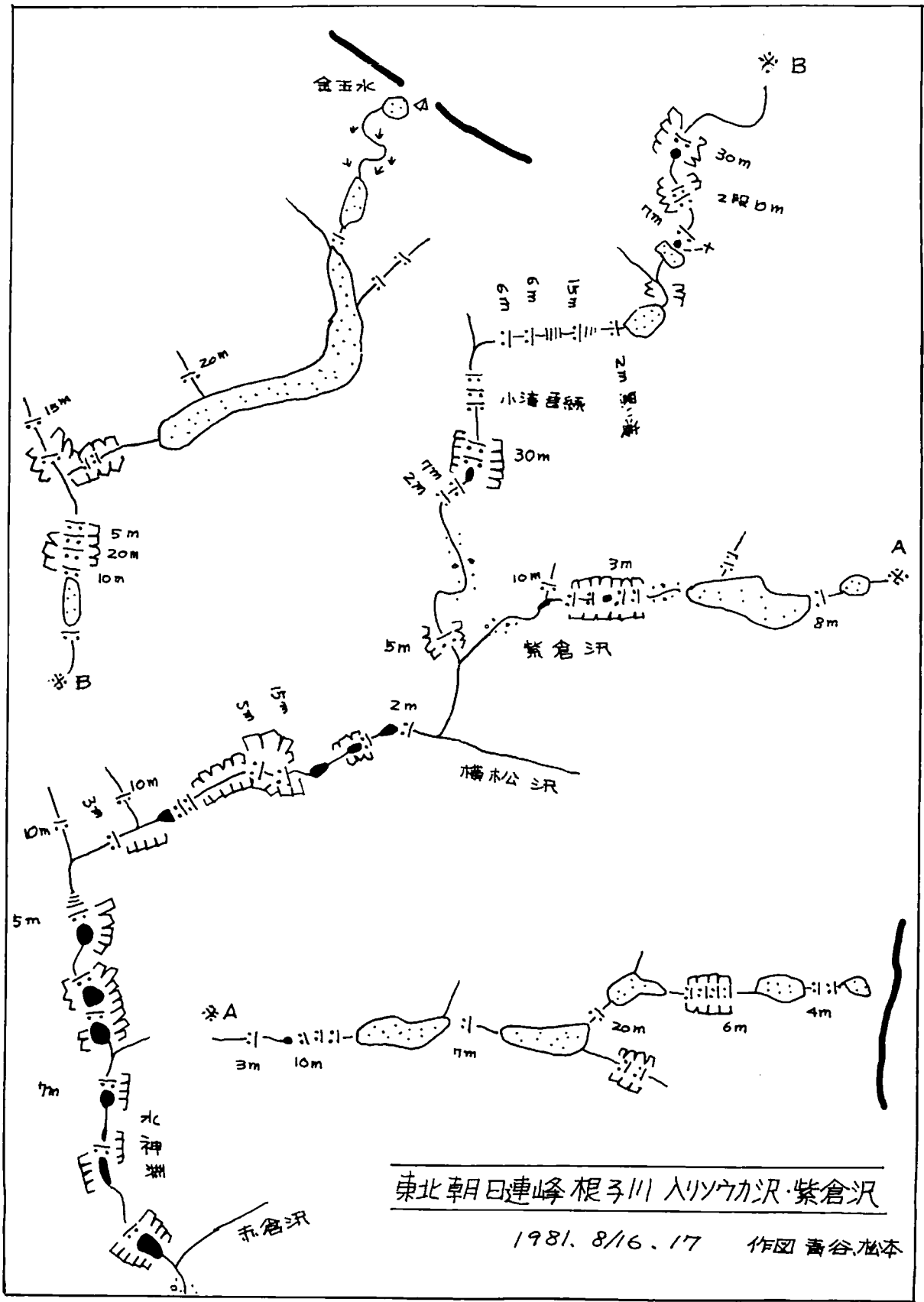
ジュを形成する。ちょっとした、小滝も国産で、やむなく左岸を高捲く。降りついた地点は、2段20m近い滝が、豪快にしぶきをあげ、美しい。ここまどが、核心部であり、小した淵と小滝が続いて、横松沢を入れる。ここからは、高度に、小滝と淵が連続する。小した淵に、這いたちられ右岸をまく。右岸上方には、踏跡があり、これをたどると、容易に進むことができる。しかし、一旦、首まどっかた、松本は、あつぱあつぱともがまながらもこの淵を突破し、河床伝いに進んだ。とろとろ紫倉沢も近いと思われる頃、またしても小淵につきあたり、ここは思いまて皆泳いで突破する。紫倉沢合流点の見える、砂地を今日の泊場とする。松本、青谷は、さっさと釣りに行くが、さつぱり反応なく、またしても成果なし。タキ火に服をかかわし、夕飯もそこそこにツェルトに入る。

8月17日

### 入リソウカ沢 (青谷、宮崎)

出合 7:00 ~ 終極 15:15

紫倉沢へ入る遠藤、松本と別れ、入リソウカ沢へ入る。出合の5m滝を越えれば、華やかなゴロ帯が左右に屈曲しながら高度をあげて行く。急に沢は緊迫し、2段30mの大滝に行手をほくまられる。とても、くりつけず、右岸を高捲く。しばらく、楽しい、小滝が続く。マントリングで越えたりして行くと、2段15mのナリ滝、右壁をかるく登る。黒い小滝を高捲くと、しばらく雪渓となる。スノーブリッジの崩壊したブロックの上は、ゴルジュとなり7mの滝が落ちる。右岸は垂く、左岸はスライ状で大高捲きの場面、ギヤルを出し左岸にとりついてみるもの、悪くやめ、まいったあげく、直登を試みる。5m程の釜を、水泳に自信のある宮崎がしぶりながら左壁に泳ぎつき、荷物をギヤルで送る。水流浴は意外に水圧がきつく、登れず、青谷トツゴで左壁の弱点を、ハーケン一本で、抜ける。沢は左折し、2段10m滝は左岸を捲き、懸垂で沢に降り立つ。眼前に30mの堂々たる滝で、これは右壁を快進に越える。右手に尾根がはりだしてくる。





と左折し、小滝の上はいやらしいスノーブリッジが見える。趣きうたので、右岸を高捲く。本流は、急に勾配を上げ、滝が連続する。降りるに降りられず、捲き続けると、踏跡に出て、この部分と抜ける。正面にリウカ沢は、はるが高みより滝を連続し、本流は右折し、まごいゴルジュとなっている。ここも左岸を高捲く、ここでピッケルを拾う。降り口は雪渓となっており、以降ゆるやかに伸びあがっている。小朝日も背後に望め、開けた気分がよい雪渓歩きとなる。右岸より20m滝となっている下で休憩する。淡々とした雪渓歩きが500m程続くと左折し、周囲に稜線の草原帯が開けてくる。100m余の3段の滝は、姿をみせず、ブロックの重なる急な雪渓を左岸から捲き、気味に登り、緩くなった所で雪渓に降りれば、しぜん、稜線近くのお花畑へと入って行く。最後の雪田をぬけると、金玉水のテント場に飛び出す。爽快な幕切木であった。空身で朝日小屋に向えば、紫倉沢パーティが頂上で昼寝をしていた。(書谷記)

### 紫倉沢 (遠藤、松本)

紫倉沢出合 7:05 ~ 二俣 10:00 ~ 稜線  
12:50 ~ 大朝日小屋 14:15

紫倉沢は、大きな滝もなく、雪渓の断絶する沢である。4つめ雪渓は直接おろすことができる。右岸の葎付に目付け、しかしすぐ行きづまり、途中から木を利用して、川底にアプサイズンでおりる。つめは、葎付と雪田の急斜面で、地下足袋では非常に登りづらい。(松本記)

8月18日(晴)

### 荒川東俣沢右俣~左俣(松本、駱)

大朝日小屋 5:50 ~ 右俣 F35m下 8:50 ~  
右俣、左俣二俣 9:40 ~ 左俣 40m滝上 11:40  
~ 大朝日小屋 14:30

大朝日岳を越し、一旦平らになった所より、藪の中に飛びこむ。約40分の藪こぎで、水流に出る。右俣35m滝は、途中にテラスがあり

そこでアプサイズンをくぐる。40mガイル1本でどうにか、おろすことができた。

左俣は、その出合が巨岩によって阻まれ、その上から、水を飛びだす、40m大滝を、はじめとする連瀑となっている。下部の滝は、簡単に登り、途中から左岸のかん木まじりの岩壁にとりつく。岩は風化しており、かなりきびしい思ひをする。後は、大きなナメヤ、シワークライミングもあり、楽しく登る。言はば草原状で、大朝日小屋のすぐ下のお花畑にとび出す。(松本)

### 朝日俣沢下岩魚止沢(遠藤、宮崎)

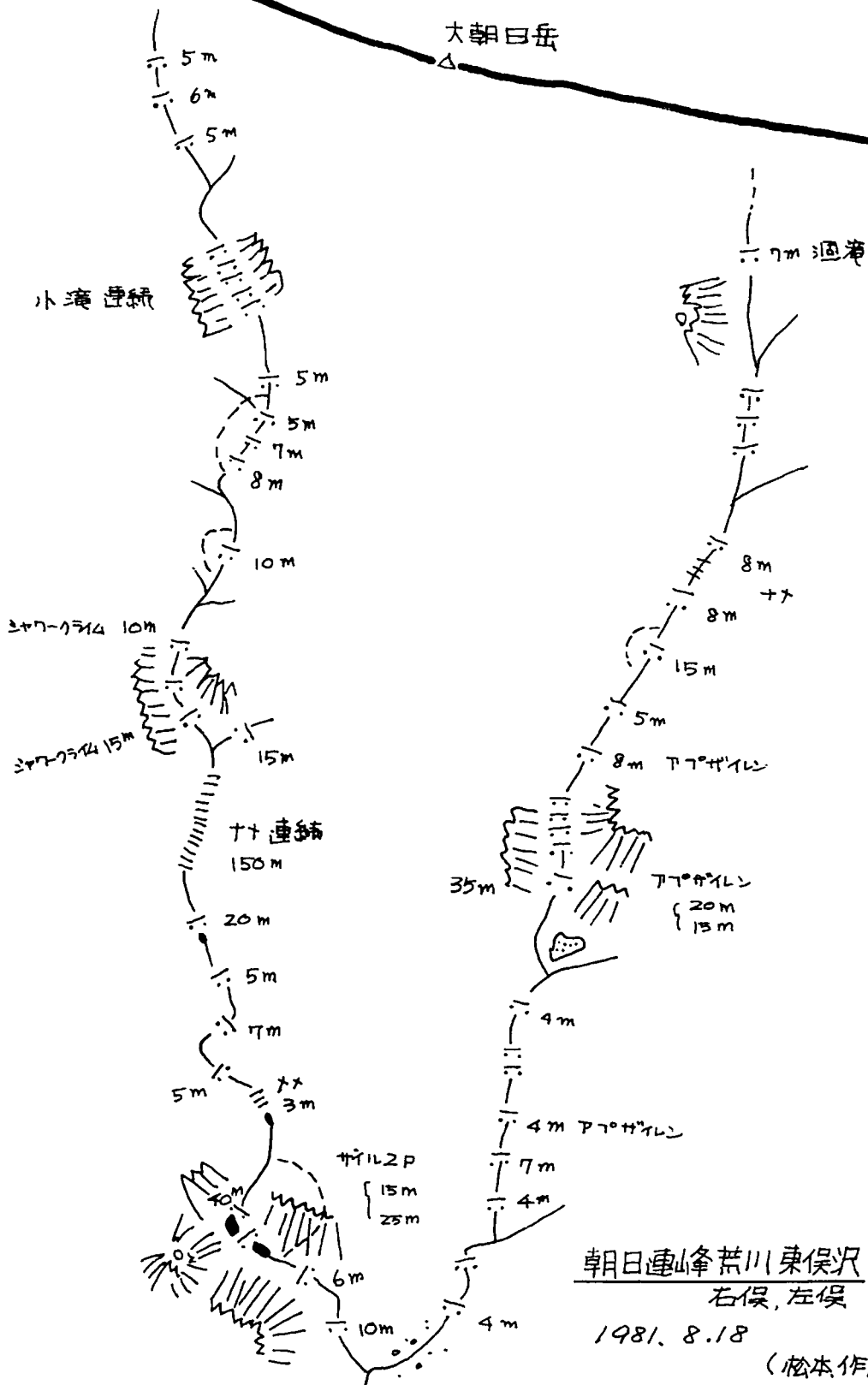
朝、6時前、大朝日小屋を出発、大朝日岳頂上で、東又沢パーティと別かれ、大朝日岳、平岩山1のゴルジュと向かう。ゴルジュ小休止の後、朝日俣沢本谷を下降するが、出だしの露岩帯は、岩がもろく、慎重に下る。途中の雪渓では、危険を感じ、2人離れて歩いていたが、突然ドンという音とともに、遠藤の左脇1~2mの所で雪渓がくずれ、2人肝を冷す。岩魚止沢出合で小休止をとる。遊歩道にも載っている、すきりた滝が非常に美しい。下岩魚止沢目ざし、さらに下降を続ける。途中滝があり高捲くのに苦労する。泥のまじった雪渓が金切木金切木につづき、歩きにくい。10時前に、下岩魚止沢出合につく。

出合の7mの滝は、かぶり気味で右岸を高捲く。さらに次の滝をこえた所で、沢にもどる。しばらくすると、12mの滝があり、ガイルを出し左側を直上する。次の滝は、途中からガイルをだす。ゴルジュ帯となり、やがて凄らしいものがなくなる。昼過ぎ、食事をとるが、ほとんど水流は見ない。溯行を続けると、途中右岸に絶好のゲレンデとなり、とうとう岩場などある。最後のヤブはとこも濃く、足が地面につかない。一時間強、やぶにさすしやつの思いで稜線に出る。中ツル尾根をたどり大朝日に向う。

この沢の記録はみたことなく、初登かとうそかな期待をもって入ったが、所々人跡あり、すでに人が入っていることがあった。(宮崎記)

大朝日小屋台

大朝日岳



8120

上信越苗場山釜川右俣横沢左俣

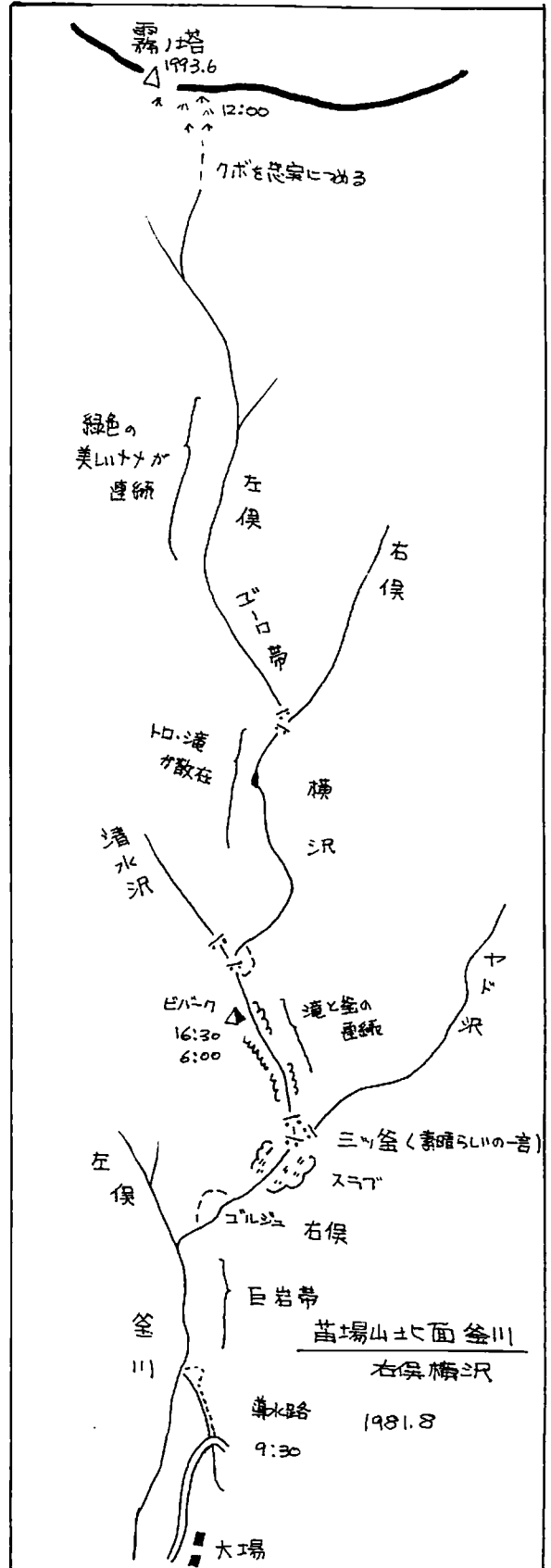
- ・ 1981年8月28日、29日
- ・ 書谷知己、松本哲郎

苗場山北面に広がる湿原地帯を源頭とする釜川流域は、数年前に徒登山岳会によって、そのべしをぬいだばかりの、まだまだ未開の地域である。その記録にある三ッ釜の美しさにあこがれ、計画してみた。なま時を同じくして、「山溪」8月号に、小泉氏による釜川流域の地域研究が掲載されたので、どちらとも参照いただきたい。

苗場山一帯は、頂上附近の広大な湿原台地に代表されるように、広く台地状の平坦面が広がっており、湿原も散在している。この台地は、北に向ってゆるく傾斜しており、その末端は信濃川沿まで追うことができる。この階地は地質学的に言えば、いわゆるグリーンタフ地域にあたり、浅海直に厚く堆積した火山噴出物を主とした、新オ三系の地層によって構成される。この土壌域を深く解析して流れる、釜川は、いたる所に緑色に変質した美しい凝灰岩層を露出させている。特に三ッ釜に顕著な凝灰岩質の広大なスラブ壁は、昨夏訪れた隣の鳥甲山北面釜川と非常によく似ており、この附近の沢の特殊徴であろう。岩質が比較的水の浸食に弱いこともあり、沢床は至る所深い釜を形成する。

8月28日

長野至由にて、越後田沢駅につく。77シに乗り、大場集落の先まで入る。大谷内ダムへの真水路沿の小径に導かれ、40分程で、釜川の取水口に至る。昨日来の雨で増水した釜川の濁水は、曇天と同国の暗い岩相のせいか、ゴウゴウと我々を圧倒し何となく不安な歩行開始だ。窸々たる巨岩帯を抜けると、トロなどがあらわれるが、水量も多く、左岸を巻き気味に進む。程なく二股となり、水量を二分した右俣は5m程の滝が続き、大きな滝の先に10m



滝があらわれる。右岸の岩稜をたどる。降り口に迷い、ザイルを出し淡いトラバースで沢床に降りる。難場をすぎ、不気味な色の水流にも小躍れたせいか、やっと余裕をもって、快調にへつっていく。30m程の箱型の瀧は、右岸の踏跡にそって、トラバース、谷川の特徴が出てくる。昼食後、釜を徙えたゴルジュとなり、泳いで突破かと思われたが、無理とわかり、左岸を大きく捲く。三ツ釜の見えるのもすぐだと思えば、気のせく高捲まだ。果して、三ツ釜が木陰に見えだす。何と奇妙な、そして美しい滝であろう。スラブとフッシュのコンタクトラインを、アップザイルを交えて沢床におり立つ。両岸のスラブ壁に微妙なへつりを続けると、三ツ釜下段直下に至る。下段15m。その上にヤド沢と横沢が釜を同じくしてマカ滝となって合流する。この造型の素晴らしさには、驚くばかりだ。左岸のリッジ状をフリクシオンで越え、横沢に入ると、マカと釜の連続となる。いっしょに、水も澄んだ色をとり戻し、緑色凝灰岩の緑を反映させて実に、美しい。微妙なフリクシオンをきかせて、右に左に越えていく。下部に相当時間を費したので、ゴルジュの切れ目の砂地をどバーク地とする。眼前の岩影から姿を見せたのは、鮮に黄色に輝くテンであった。夕闇せまる一時、釣に自然の趣みを求めれば、美しい岩魚が、木公本の釣ざおをしならせた。7インを友に心地よい夕食となる。

8月 29日

断続する。緑色のマカと釜をして滝。快調にとぼす。清水沢との合流点前は深い瀧と15m滝。ここは無理せず、左岸を大きく捲き横沢に降り立つ。時々現れる瀧も快調に越え、深い瀧はへつる。15m程の瀧は、泳がせれることは覚悟してきたので、勇んで水に飛び込む。10m滝の左壁を越え、いっしょに直登困難な15m滝、左岸の踏跡をたどると右俣に降り立つ。左俣に入ると、小瀧がいくつか連続するが、程なく沢は開け、木々の緑と河床の緑と、青空と太陽の光がまぶしく、交錯散乱する。単調なゴロ帯だが、時折現れる緑色のマカが

実に美しい。周囲に稜線が望めるようになると、沢が2分し流程の短い右沢に入る。クボ状になって続く小沢をしばらくたどれば、いっしょに水も涸れ、ササヤブに突入、15分程で、稜線上の道に出る。反対俣には、たっがかしい、烏甲山が、いっしょに群を輝かして立っていた。

苗場山のメインストリートをはずれた、登山道は、稜父のような原生林帯や、はつと開けた草原をぬいたがら歩いて行く。バス時間に追われ、坂川への道をたどる。里にある頃は、どしゃぶりとなってきた。

(菅谷 記)

8121

上越 金城山北麓 水無川(中絶)

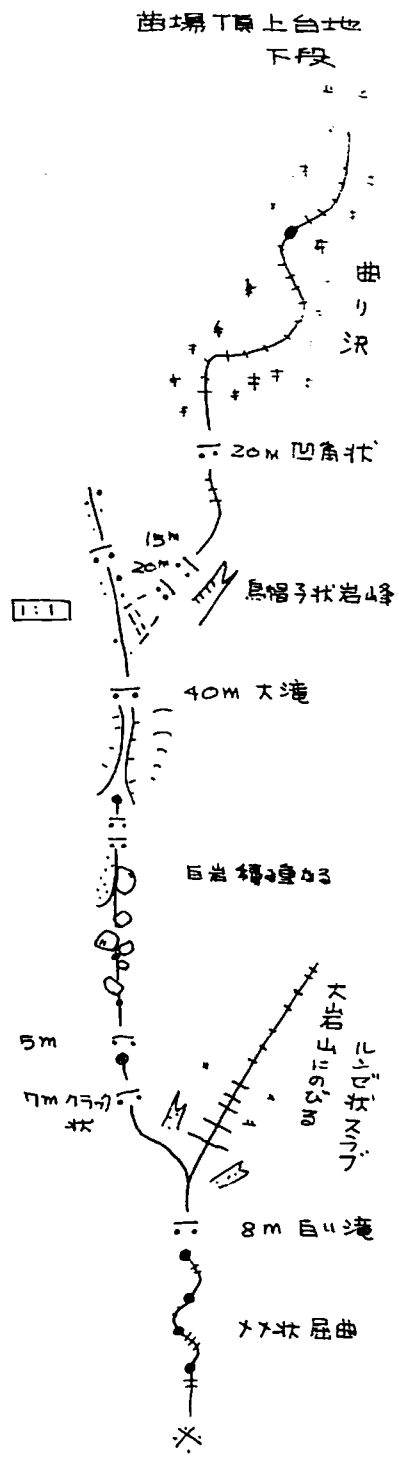
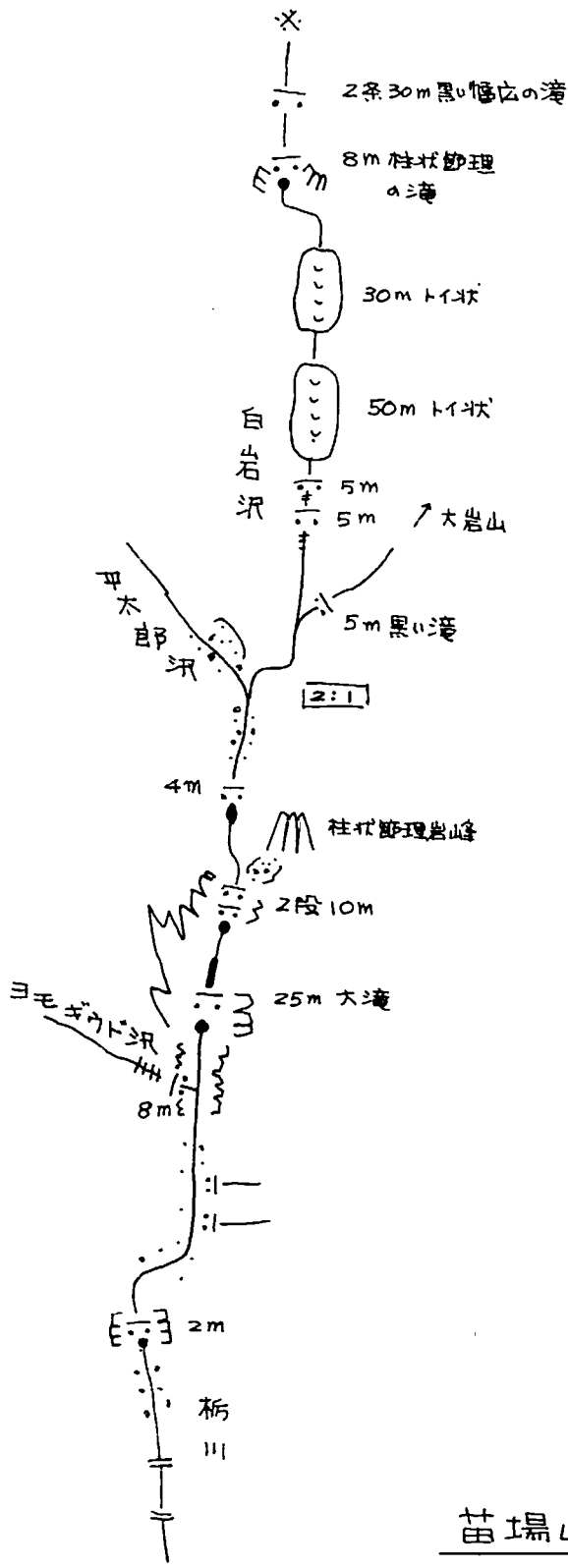
- ・ 1981年9月6日
- ・ 森下 道夫

巻機山へ金城山をつなぐ主稜にひいて、金城山北東面中川口は、もつとも登山密度の少ない部分だろう。屋根道は、滝入コースと水無コースのZルートがひらかれており、時々登られているようだ。

沢のルートとしては、中川の2支沢、皆沢と水無沢が考えられる。両沢とも、下部はやぶがひどいようだ。地図を見ると、特に水無沢は、かなりのまねみを入れてあり、今回計画してみたのだが、どうにも意気があがらず、途中より引き返した。

金城山北東面は、平野から山がいきなりはじまっており、近づくにつれて圧迫的なふんいきがある。積雪期には、皆沢と水無沢の中間リッジは面白いルートになるのではないかと思えた。





苗場山板川白岩沢曲り沢

1981.9.20

8122

## 上信越苗場山 析川 白岩沢

- 1981年9月19日、20日
- 森下道夫

9月19日(雨)

朝から雨が降り続け、仁成館の湯舟につかり、雨にけむる外の風景を眺めたり、構になって日記をひもといたりして、一日が、しごくゆつくりと、暮れた。

9月20日(晴)

析川の下流は、釣人がよく入渓するらしく、人跡いたるところにある。両岸、ゴルゴキ状を呈しだすと、カカリ谷の格好で、ヨモギウダ沢(2万5千図では析川とある)が、すだれ状の美しい滝を入れる。脚には、大滝ともいうべき、25m程の直瀑が豊富な水量をおとしている。昨日みつけておいた、捲道を辿る。滝の上には、釜をもった、2段の滝がつづき、上段を登るべく、倒木の頭に登り滝身に、乗り移ろうとするが、どうにも一人ではたおなく、右側の泥の詰った凹角を登る。平太郎沢出合まで、平凡な河原が続く。

白岩沢は、これといって変哲のない川沢で、左岸より入る。藤島玄「越後の山旅」では、白岩沢、上音二股の右沢を曲り沢、中村鯉「ふるさと山」では、梯子沢となっている。大岩山にのびる、支沢を見送り、小棚を登ると、透きとおるような一枚岩の細くえぐられたトイの中を、水流が、波のようにおどろすべつてきて、思おすはっとしてしまった。滑の沢身をいくと、大岩山にのびる、瓦を積み重ねたようなレンゼ状スラブが仰げぬ。沢は、巨岩を積み重ねて、高度を稼ぐようになり、一つ一つ、ポルダリングしたり、迂回したりして越して行く。おわりには、44ニヤクの大滝がひかえ、右に開けた凹状部を登る。左岸より入る、曲り沢のナ滝部を横断して、曲り沢2つの20m程の滝を左側より捲き、沢底におりる。その上の白い

凹角状の20mの滝を登ると、沢は、森林帯を屈曲する、可愛らしいメメの小沢となり、背後に苗場山等を望みながら、ひたひたと溯ってゆく。倒木の目立つ源流帯に入り、身の丈をこす笹竹をこぎだす。頂上台地の広大な湿原帯を横断したいと気持ちもやまやまどあったが、時言と地図ど、にらみながら、それをあきらめ、同沢を下降することにする。

苗場山南西面より、大きなカーブをえがいて、頂上台地にくいこむこの沢は、なかなか変化に富み、楽しめるものだと思う。

小赤沢まで歩き、津原、十日町、大日町とつらぎ、なんとかこの日に帰京できた。

(和山5:50~引返10:30~エンテ13:40)  
~小赤沢15:10

8123

## 上越 大兜山ジロト沢右俣

- 1981年10月10日、11日
- 森下道夫、青谷知己

10月10日

あいにくの曇天で、落合にベースを張り、一眠りした後、尾根をいっ越えた、下津川小沢の左岸スラブ帯を登りに行く。どこをまちがえたか、重松越路の道を途中で、はずしてしまい、2時間程、右往左往ヤブをこぐが、どうにも尾根を越えられなかった。木に登り、暗雲ただようジロト沢を望み、しかたなく、もどる。帰路、何でもない、間違いに気付く。枝道らしきものは、とにかく、少し先まで辿ってみるものだ。

10月11日

まだくちやみの中、ヘッドランプをつけてジロト沢を溯る。小気味よい、ナメの棚を越えていくと、圧倒的右右俣が見えた。右俣は、大兜山頂部より、本流の河原まで、一つの大なる滝となって、なまおちる。同じく右俣をめぐす小泉氏たちと別れ、下部

11:45

水流を捲り大巻の  
滝口。

右のカンテを巻る。

左側のスラブ

快適なフェース

釜をもた中腰の  
滝口。

快適なスラブ

フリコトラバースで左  
壁に決り凹角を  
登る。

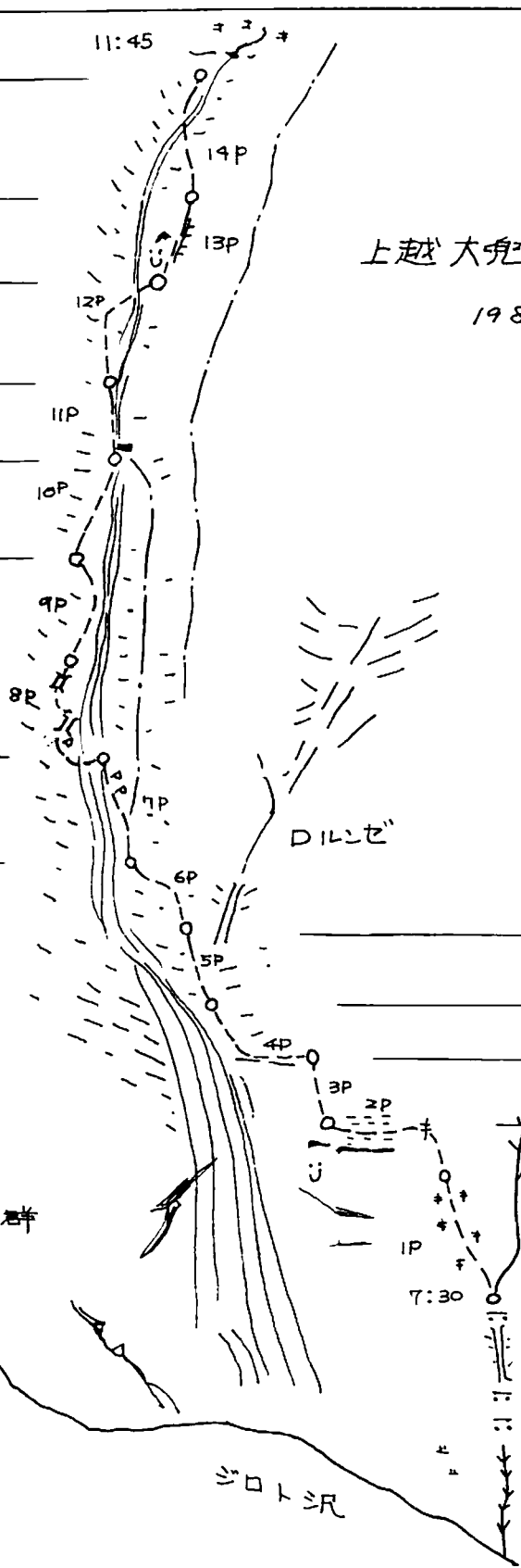
水流際をめぐり  
直上する。

快適なスラブ

# 上越 大兜山ジロト沢石俣

1981.10.11

(森下作図)



E.F.G.

スラブ 傾斜 岩群

傾斜

DILINSE

快適な階段状  
スラブ

カネコ木のバンド  
フリコトラバース

岩付直上

C  
L  
I  
N  
S  
E 傾斜の強い  
ゆるやかな岩付壁

CILINSEの細い  
ILINSE状の傾斜壁

ジロト沢

の大滝をCルンゼ側から、トラバース気味に落口にぬける。上部の開けたスラブ帯に入り、爽快なスラブを、振り子トラバース交え、水流沿いに、ザイルをのぼす。水流は、まぶしく透きとあり、白く光る巾広いスラブ帯を、斜行しすべり落ちをゆく。9P程で落口にでる。

右俣は、あたたかき大兜山頂部を、たゆたう小沢となり、広がる青空に、白い雲が行く。爽やかに風の吹く、ジロト平に上り絶う。

左俣より、三ツ石尾根左稜、展望台の尾根をたどり、急な草付帯を、左俣路奇点を交点に、左俣を十字にきるように下る。もう一度、みあげる右俣は、逆光に映え、その威厳ある姿の中にも、今は何か、我々をあたたくつつみこんでくれるようなものがあった。

(森下記)

8125

奥秩父瑞牆山カマンボロン大ヤスリ岩

- ・ 1981年 10月31日、11月1日
- ・ 青谷知己、井汲重弘

10月31日

カマンボロン・中央洞穴ルート

カマンボロンは、高差100m余の岩峰で、中央の大ハングが印象的だ。取付まで、踏跡を約1時間。

1P、大ハングに続くルンゼをたどる。40m。2P、大ハングルートと別れ、糸田かなフェス、そして首が回らぬ、44ニ-を抜ける。40m、3P、ルンゼはハング下に消え、右壁を登る。20m。4P、核心部、大ハングの根元に、1m幅のトンネルがある。そこを、目指し、人工とフリーのミック。井汲が頑張り、40m、5P、トンネルに続く44ニ-を登る。右壁の試登ルートに入てしまい、行きつまって戻り時間を費す。20m。6P、垂直壁の人工より、まわどく44ニ-を抜ける。40m。7P、凹角を登って終了。40m、圧倒的なノックリした垂直壁に内面

登攀を駆使した、このルートは見事だ。終了点から望まれる、十一面岩のスケールが素晴らしい。末端壁に、何人かが取りついている。大面岩との、コンタクトラインを、空中懸垂で下降する。途中、道に迷ったりして、暗くなって車に戻る。

11月1日

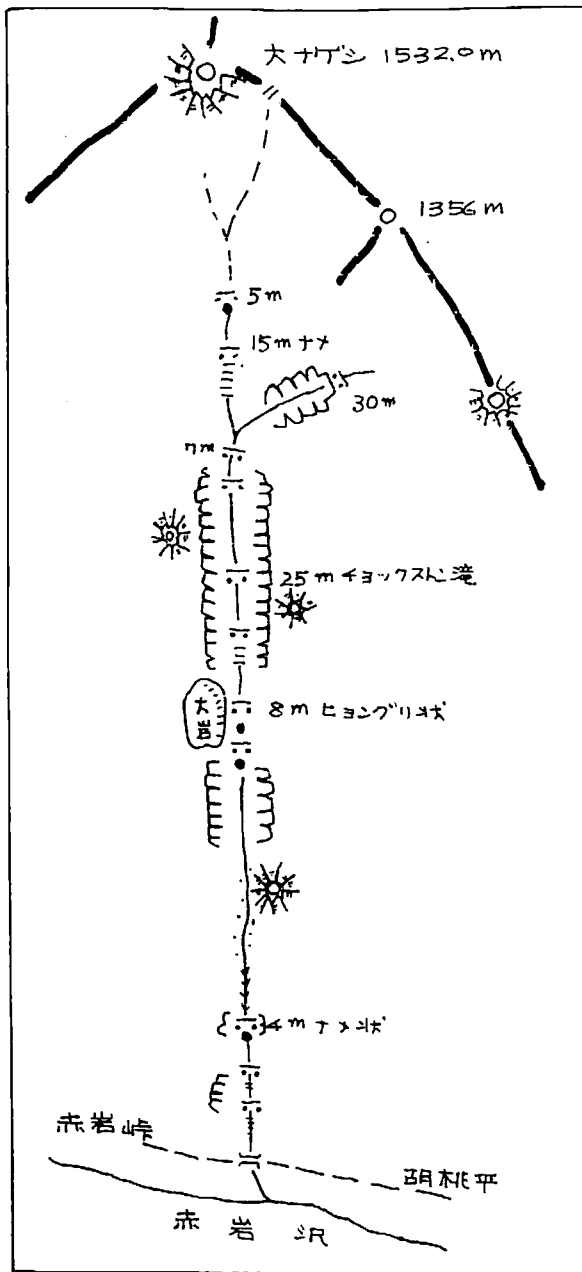
大ヤスリ岩 ハイポイントルート

十一面岩を次回に回し、頂上附近の岩峰で遊ぶことにする。瑞牆山荘まで車を回し、取道をかけ登って、大ヤスリ岩まで1時間強。青空に向かって、そびえる岩塔は美しい。フリーの可能性のある、フックやクラックの走る、基部壁の中央の44ニ-が取付。1P、3mのフックより、人工まじりで、44ニ-沿いに直登する。安易にアブミを使ってしまい、気遅れするところだ。2P、44ニ-を抜けると大テラス。右寄のクラック沿いに固い岩をぐいぐい登る。ナッツをきかせる。3P、5mの44ニ-をバックアンドフットで抜けると最後の垂直壁となる。ポルト梯ろは遠いものの、快適。折からの休日、頂上からは格好の見せ物で、拍手がわく始末である。楽しいルートである。

物足りないので、本峰前壁へ向かう。本峰の登山道側には、小規模な岩場が広がっている。中央附近に取付き、レイバック等を楽しみつつ、好きな所を登る。2Pで頂上に達する。この付近は岩遊びをするに、事欠かない楽しいエリアである。

瑞牆の岩場はどれもすつきりした岩塔であり、岩も固く岩登りが実に楽しくなってしまう。十一面岩末端壁のフリー1Pに1日を費やす僕の友人のような連中もいるが、個々の完結したルートも、十分満足しうる内容を持っている。ナッツを使うのも、また興味深い。ハードフリーの波に憶えることなく、それでも少しは、クリーンクライミングの意識を持って、岩登りを楽しもう。





8126  
西上州 大ナゲシ 赤岩沢支流

- 1981年11月8日
- 森下道夫, 中野敏彦

ナゲシ沢出合 9:00 ~ 最後の滝 11:00  
~ 12:00 大ナゲシ頂上 12:30 ~ 13:50 日空  
鉾山.

西上州の槍ヶ岳といっても、そういう山は色々あるのだけれども、この大ナゲシも立派な岩顔をしていて、他の兄弟たちにも顔負けをしないだろう。

頂上1532mより延びる北東尾根と、いくつかのピークをもつ北西尾根にはまかれた、直接頂上につきあがる赤岩沢支流を登った。沢名は不勉強のためわからなかったが、ここではとりあえず、なげし沢としてみよう。胡桃平より、赤岩峠への道を少したどると、小橋のたもとに、流れこまなみの川沢が、この沢だ。少し先にナメの滝がある。トイ状の滝に始まる。中流域は、ゴルジュ状をていしてあり、西岸の岩壁が、おおいにぶさるようだ。面白くチョックストシをいだいた黒いナメ滝を、つはりご登り、その上の幾つかの滝をこすと、右の北東尾根に上る沢が高い岩壁よりおちこんでいる。源頭頭の霜の立った、ガシ沢を言ふめ、待望の大ナゲシに立つ。晩秋の青空の下、幾重の山並が重なり、延び、続いていた。

下山は、赤岩峠より、中津川にありた。  
(森下記)

8127  
前日光 大芦川 ヒキガタ沢 ~ 本沢

- 1981年12月13日
- 森下道夫, 松本哲郎, 善谷知己, 宇戸泰成.

東京 1:00 ~ 5:10 河原沢林道 9:00 ~  
ヒキガタ沢 ~ 11:40 上部2段 12:10 ~ 稜  
線 13:00 ~ 本沢 ~ 14:10 支沢氷瀑 15:20  
~ 林道 16:10 ~ 東京 20:30

氷を求めてきた、前日光大芦川の流氷は、おたやかな水の流氷であった。深夜、林道奥深く入って、車中仮泊。朝、雪の舞う、沢沿いの道を行き、二股より、ヒキガタ沢に入る。棒滝、ヒキガタ滝、3段の滝、2段の滝、左滝、幕師滝、と10m前後の滝が続くが、ごく一部しか氷は

はっていた。葉師滝より、小滝の続く  
白い谷歩きをして、笹原をこぎ、葉師岳～  
夕日岳の稜線にでる。

奥日光からは、雪まじりの風が横なぐり  
に吹き上げ、冬々冬々とぼーんとの叫  
びしまりであった。適当なガシ沢より本  
沢にあり、山道をいくと、右岸に2段30m  
の氷瀑がかけ、ここでウチをはらす。本  
沢のナル滝は、落口より滝身がのぞけず、  
かなりのスケールだ。捲き道をたどり、車に  
もどった。(森下記)

8128

奥日光女峰山北面 鬼怒川深沢

- ・1981年12月30日～1982年1月1日
- ・森下道夫、穴戸泰成

鬼怒川支流、女峰山北面の谷は、沢歩き  
の対象として、一地域を形成しており、スケール  
の大きな谷である。過去、冬の谷歩きには、  
三沢、野門沢に大阪あらかじの会の記録が  
あるが、どちらかというラッセルに終始する  
ような、地味な谷である。各沢は、途中1  
つ2つ大滝をもつ峰を特長としてあり、これ  
らの氷瀑を登ると、より爽快な谷歩きが  
できると思う。(参考文献として、『朔行119  
大阪あらかじの会』夏の記録として 岳人134号)

12月30日

8:30 野門橋より鬼怒川にあり立つ。  
深沢、出合附近のゴルジュは、とうとう水が流  
れ、左岸を捲く。(山道がある。)所々淵  
を持つ沢を、すべって水につかたりしながら  
溯る。

三界沢出合の滝をのぼると、F<sub>4</sub>40mの  
滝が姿をあらわす。凍結をみない。不気味  
な黒々とした岩肌、小石がはめこまれ  
右岸は、とほうもない柱状節理をみせる。  
左岸の窪を登り、小尾根の垂越より、F<sub>17</sub>  
40mの大氷柱をのぞむ。捲く事にし、危  
な樹林帯を登り、小沢の棚をさつたり、  
大滝左岸の岩壁帯の狭いバンドを2P

這って落口に懸垂下降する。落口の河原  
にビバーク16:00

12月31日

7:40 発 ゴーロをしばらくいくと、円形劇  
場のようなF<sub>18</sub>35mの洞窟が沢をふさぐ。  
右岸の懸崖を1P登り滝上にでる。

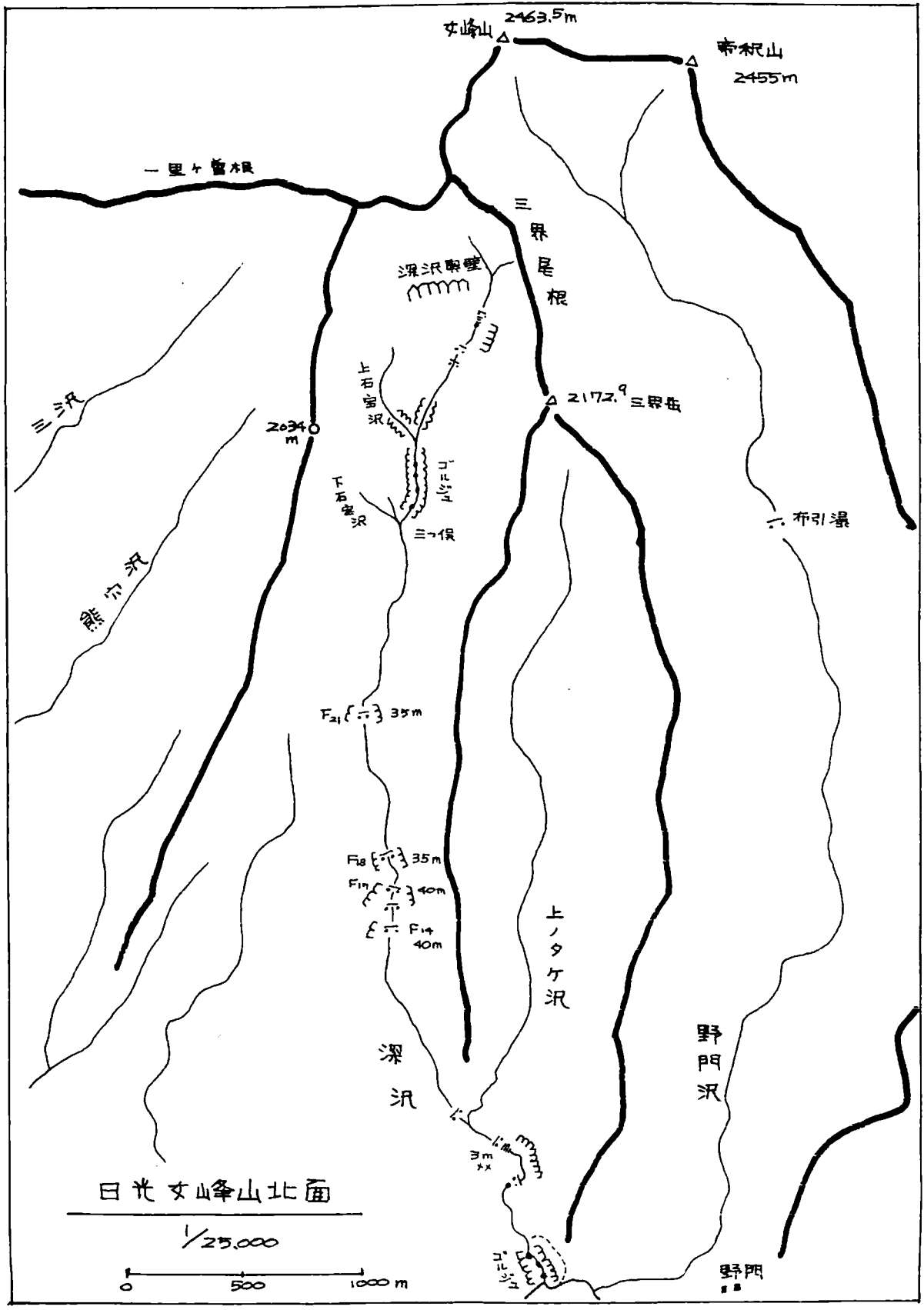
これよりゴーロが続く、1つたりきたり  
雪に隠れた転石にふみまどう歩みは、  
のろい。やがて双頭の門といった、F<sub>21</sub>35  
mの岩壁が、沢の真中にどっしりあり、  
沢と縁をきめたような不思議な地形をみせ  
る。中央は浅い洞穴のようにえぐれ、巨大  
なつららが垂れている。左岸を捲き、深い  
森林帯の中のラッセルを続け復水してくる  
と、沢は三つ俣となり、右の本流はゴルジュ状  
となる。一段と雪は深くなるが、脇には、  
釜の風にゆらく水面がホッカリと口をあけ  
ている。研が木たような陰鬱なゴルジュ状  
を呈する上石室沢出合上部の左岸より、  
氷瀑を人れる沢の小台地にビバーク15:40

1月1日

7:00 発 新しい年の始まりだ。気も新に出  
発する。ゴルジュ両端に集積した積雪を踏  
みわけ1つ2ついく。やがて沢は開けて、う  
っそとした樹林帯を曲折する沢となる。  
上部には、深沢岩壁が見えだし、かなりの  
迫力だ。

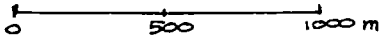
階段状のメメ滝が続く部分は、一向  
にはかどらない。深い雪のラッセルにありそ  
をつかして、アゼこのツツツのクリアランスで  
メメを1段1段登る。登ると目の位置に  
次の水たまりが見えるという。冬の谷歩き  
である。岩壁下を右上する雪壁を登り、急な樹林帯を登っていくと、三界尾根  
の支脈に出る。

あとは、ひたすら、雪とヤブをこぎぬいて  
三界尾根13:00。縦走路13:40。女  
峰山がひとまわり高く、まらめく。早速、  
一里ヶ首根、赤崩山より下山。焼石上部  
でとっぷりと日が暮れ、丸山周辺でまよ  
う。霽降高原ハウス巻18:45。



日光女峰山北面

1/25,000



8129

御坂十二ヶ岳南面三沢

- ・ 1982年1月10日
- ・ 青谷知己、森下道夫

出合 8:45 ~ 11:30 F4 13:20 ~ 14:20 キルト  
 14:40 ~ 15:25 毛無山 15:40 ~ 長浜 16:30

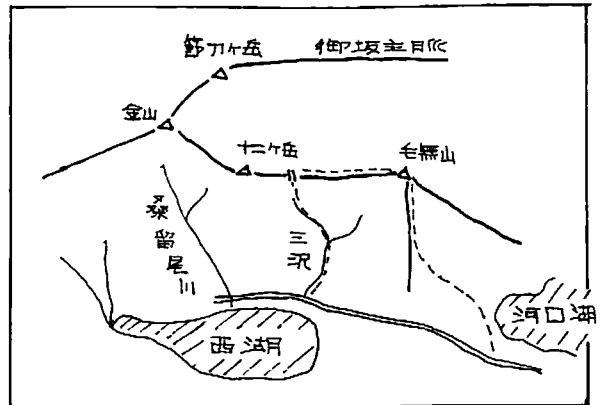
富士と湖をバックにした、御坂の山に一度行きたいと思っていた。三ヶ峠周辺の氷のゲレンデに負けぬ内容を期待して…。

バスが西湖畔に入ると三沢の出合である。ようやく、暖かみを満した太陽の輝き、あたたかな湖面を見てると、ビッケルとヘルメットがやけに薄ま立ったものになる。

葉落を過ぎ、堰堤をいくつか越えると、水流が現われ、沢らしくなってくる。細々とした水流ながら、氷の毛配は厚い。濡れた岩はゆげにすべり、森下は半身を水につける始末だ。小滝をいくつか越え、スラブ状のへりなど、気分をとり直していくうち、F1下で屈曲した氷床となる。F1氷瀑10m、薄いものの伏産なダブルアックスだ。左に心せを分け、やがてF2。倒木を使い、薄い氷をだましましたまし登る。しばらくで沢は散慢になり、アイゼンをはずす。沢は心せ状になり、岩屑が沢床を埋め、時々千仞状の滝があらわれる。氷もつらら状で使えず、強引に乗り越していく。何となくやりすごすうちにF4 20mに出合う。滝下は水十字峡となり左右に険悪な心せを分けている。F4は千仞状でかなり気味、右の心せから高捲きを試みるが直い返される。先人の名残である、ボルトが左壁に見られるが、意を決し、糸巻達だが氷を利用して直登する。出だしにハーゲン打ちハンマーを打ち込んで強引にとりつくが、真険な登攀は久しく忘れていた感じとぎこちない。かぶった落口をマントルで越える。この上はもう岩屑が広がるばかりで、稜線も直近だ。しかし途中ボルトがリソグさせられたりど、やっと狭いキレットに立つ。ここで遅い昼飯。部分的に充実し、一方で散慢で、何とも変な印象の沢だった。行者返り

沢を下る予定であったが、時間も遅く毛無山への縦走路を行く。稜線は雪もなく、カヤとの尾根は日だまりハイクの気分。眼前の雄大な富士山、眼下に広がる河口湖。西湖、やはりこれが御坂らしい。家族連れにはもってこいだねと話しつつ、長浜へ下た。

御坂山塊は、新オオ系御坂層群と呼ばれる。火山岩類からなり、浸食に強いようで、沢のほり込みも浅く、三沢ほどは、断層沿いの心せのまうである。時々、鮮やかな緑色凝灰岩の含毛礫岩などが見られ面白い。溪相は、その岩質を反映するわけで、美しさを要求するのほちよと無理で、この陰鬱な心せが十二ヶ岳の沢のありさまなのだ。 (青谷)



8130

東北・西吾妻山 ツアースキー

- ・ 1981年1月15日~1月17日
- ・ 青谷知己 他1名

1月16日

天元台に入って、2日目。今日も晴天に恵まれた。昨日は山の姿に竹のストックよりしくが、ゲレンデを転び回り、今日は早速ツアーというわけである。相棒のNは北海道育ちのスキーのイテラン。こちらは山のイテラン(?) 2人たせば、どうにかなると出発。飯豊、朝日が重畳たる白銀の嶺々を横たえる。スキーヤーが下って行くのを承目に、我々は上へとツアーのはじまりだ。はじめてつけたシールの絶大土。一歩一歩が何とも頼もしい。樹材材帯を小

一時間、あけてひろげな稜線の一角に飛び出す。美しい樹氷原が広がる。すると、4.5人の山男たちがすべり降りて来た。さて、ここから西吾妻山までは一投足の距離、モンスター群をぬって、それは楽しい稜線散歩である。はしゃいでいるうちに相当の時間を費やす。展望のない西吾妻山を後に、西吾妻小屋に向かう。あとは下りだけだ。12:30 あとは白布温泉までひと降りし、ギャップで痛めた腰をだましつつ、白銀の世界へ飛び出す。平原を直滑降。先人のシュールが頼もしいところだが、神がかりのように、樹林帯突入一歩前までゴツリ七折れている。えーい、まるよとわけ入るがこれがいけなかった。樹林帯に一歩入ると、まるで方向がわからない。それではと、磁石と地図、そして高度計までも使って方向を定めるが、斜滑降、キックタシごとに方向が180°変わるわけで、どのうち頭もこんがらがってくる。それからは悪夢。あーだ、こーだと思いきや、戻りつするが、さっぱり地図に対応しない。

ロープウェイに間に合えないかも…が、今日は温泉泊りだなあ…、がこりやますいじやないの…に変わっていく。もうツアーコースへ戻るのは断念して、ひたすら下降することにする。岩記号の多い地形に悩み、やせ尻根に追い込まれ(16:30)最後のあがきてスキーをはずして谷底へ。万事休す 17:00。それをウツソー!

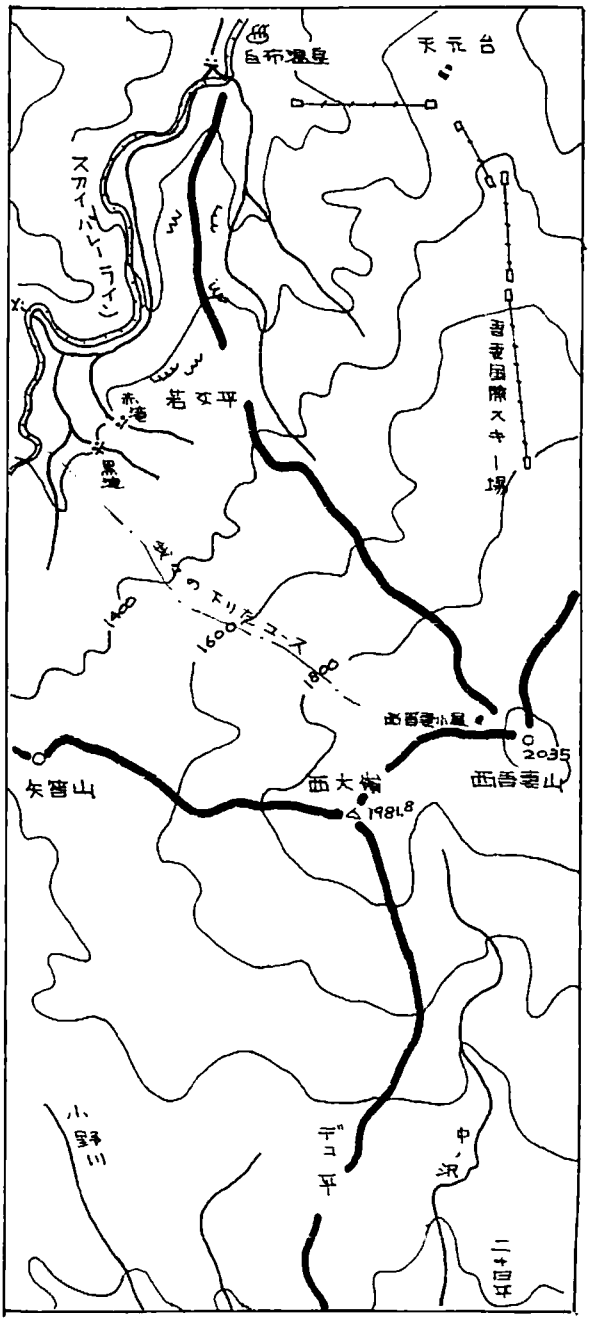
一度ゼバークを決めてしまえば、まあ一晩預ける工と気軽に考えるのだが、冬山がはじめてのNの心中はあだやかでない。木の筋に半雷洞を掘り、1人用ツェルトにひざをかかえてもぐりこむ。(19:00)夜明けまで11時間、じっと息をひそめていた。1時間ごとに、かぶた一杯の湯をわかす。

1月17日

1時間すぎ、次の1時間が続く。4時になり、みごと夜が明けくれた。お互い夢の中で、川に落ちる友を思ったが、この谷底からの脱出は意外にあった。下流に有料道路の吹きつけ壁かのぞいていたのだ。谷を慎重に2度降り、雪壁を登ると雪に埋も

れたハイウェイだった。あとはこれをたどるだけ。しかし、温泉から4kmも上流であったとは…。昨日の径足各が信じられない。延々と続く平坦面を行くツアーの終直は、やけに体がふらついた。

最後に、このコースは、吾妻連峰の中では、有名な初心者向きツアーコースであったことを記しておきます。山+スキー=山スキーならず(?)。



8131

奥秩父滝川豆焼沢支流トウグリ沢

〃 大洞川支流 お聖沢

- 1981年1月16日、17日
- 中野毎敏彦、森下道夫、中尾伸二

1月16日 (曇、一時雪)

豆焼沢支流トウグリ沢

(P=中野、中尾)

川又絶 6:10 ~ 8:00 豆焼沢出合 ~ 9:20 トウグリ沢出合 ~ 13:35 二股 13:50 ~ 14:50 登山道 ~ 17:05 川又

\*「トウカク沢」との記録もあるが、2ヶ所回  
の名称によった。

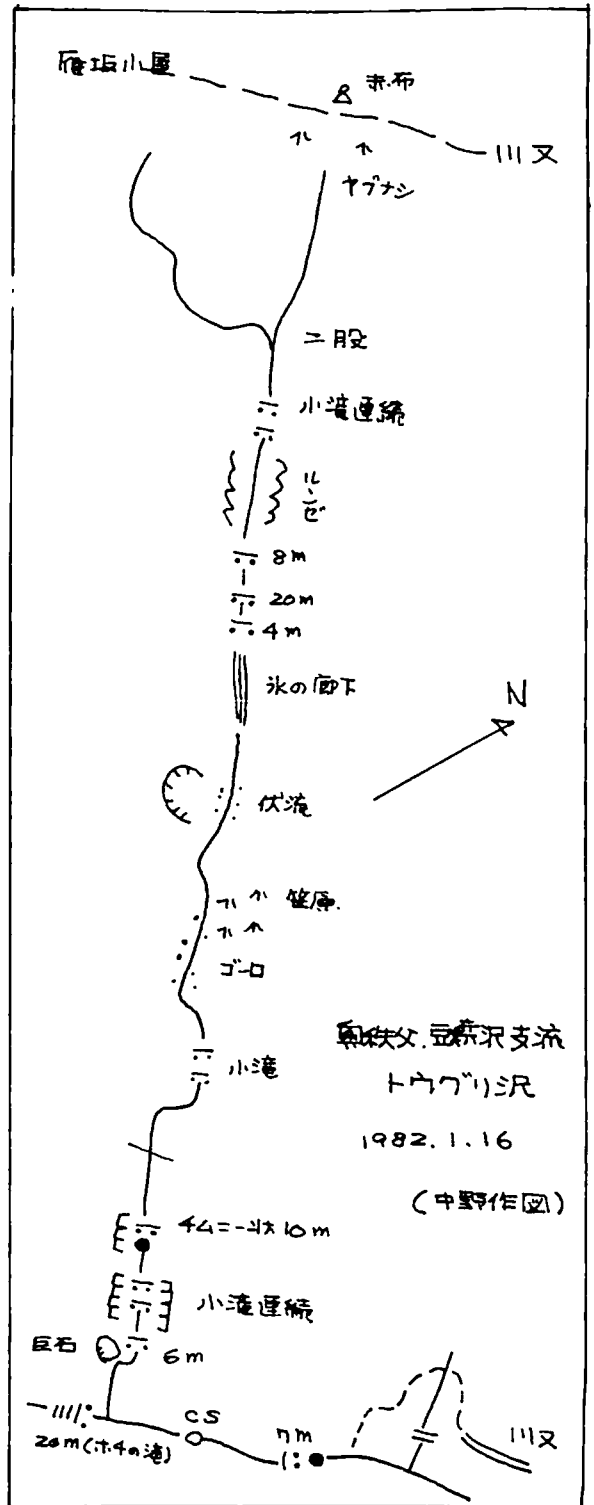
前日に車で川又まで入った。川又から林道を歩き、終点の工事現場を越えて豆焼沢に降りる。1月としては、雪もなく、晴い。豆焼沢の7m滝は、釜が一缶水で覆われていたが、人間の体重は支えきれずに、冷たい目にあう。アイゼンをつけ、丈夫そうな所を登り、左壁にあたり通過する。スラブ状20m滝(ホ4の滝)の手前がトウグリ沢出合だ。

最初に現われるのは、2段6mの氷瀑である。傾斜はきつい。小手割開けには、絶好だ。しばらく氷の小滝が連続し、順調に進む。4mニース状のクラックに氷の小詰った10mの滝は、快適だ。少し行くと沢は開け平凡となり、ゴーロが縮くためアイゼンではまず。

ゴーロにあきる頃、氷の廊下が現われる。さながら、スケート場の様にきれいに、平らな氷が廊下状に続いていく。少しの間、アイゼンなしで遊びながら、すべって歩く。このあたりから、氷瀑が連続するが、どれも傾斜はゆるく、氷も軟らかかったため容易に進む。沢が狭くなりだし、氷せび状になってきた頃には、氷の連続にいささかうんざりしてきた。二股からは、20~30cm程度の雪に埋まっていた。氷登りの疲れがでて、1はッ

た頃、やっと登山道にでる。

上部の滝の連続は小気味まいが、ポイントなるべき箇所がなく、やや物足りない沢ではある。(中野言で)



1月17日

大洞川支流お聖沢

(P=森下, 中野)

出合 9:00 ~ 引返し点 13:10 ~

未知の氷瀑求めて、白岩山北西面、大洞川お聖沢に入る。出合直ぐ上を砂防工事の人たちに、昔の工事用の道を教えられて、いくつかのえんていをパスしていく。河原にありたち、ふりかえると、新雪をいただいた、和名倉山が大きい。ゴロの沢をたどって行くと、やがて水流があらわれだし、沢は右折して、2段の氷瀑があらわれる。右岸には巨岩がどっしとすわっている。アイスハンマーをだし、1段目は「ザイル」で登るが、2段目は「アンザイル」して登る。凹状の岩壁に、薄く氷がはりついた、格好で、かなり傾斜も強く、途中1本アイスハンマーを打ちぬける。上には、ゆるい氷瀑、氷床が続くが、中心部は薄く、中野は小さな釜につかる。

左岸に岩壁が垂直してくると、沢は3つ股となり、左のものは、8mの氷瀑で、おちこみ、右の「いせ」は、岩壁部に吸収されるもので、途中10m程の蒼氷がある。岩壁はかなり大規模で、特に右側の岩峰など、あかぬけてあり、魅力的だ。

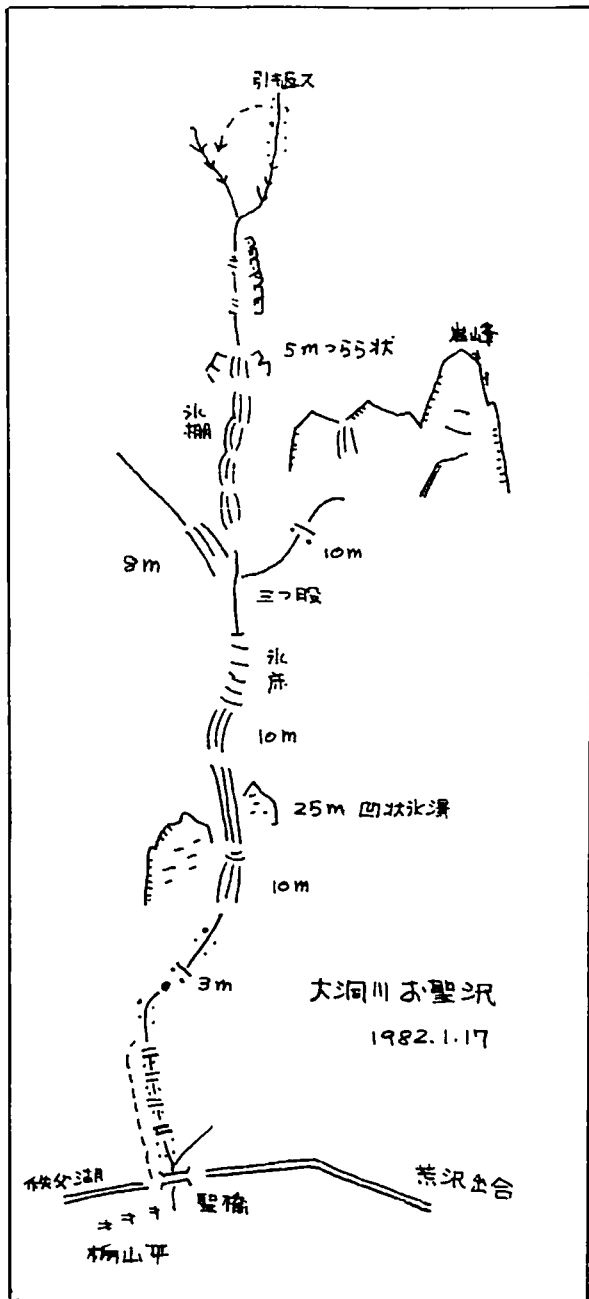
本流と思われる、真中の氷の相の連続する所を、登り、つらら状の氷瀑を捲くと、沢は「いせ」状の浮石の多い急な、斜面となる。慎重に一歩一歩登っていくが、これより上は、期待がもてず、待合せ時間も考慮して、桂沢下降の計画を中止し、引き返すことにした。

雲取山から三峰山への北方経線周辺は、まだまだ、さぐられべきものが色々あるように僕は思う。(森下 日記)

8134

奥秩父小森川滝越沢丸神滝周辺

- 1982年2月14日
- 森下道夫, 宮崎洋一



西神山南東面を源頭とする、小森川右岸の支流に、滝越沢なるものがあり、出合奥に丸神の滝という大滝が、かかっている。この滝が結氷すれば、すばらしいアイスクライミングができるだろうと、あくわくして、見参した次第である。

滝は結氷するには、しているのだが、核心部の上部は、中央が崩壊して水をぶきあげている。下段はゆるい氷瀑であり、中段は

アンザインして登る。氷瀑の右部分をダブル  
アックスでいくと、上部は、かろうじて1m幅の  
うすい氷が落口まで続く。太目の自分は自  
信がもてず右の草付に逃げた。直上したと  
しても、下段をのぞいて60mはある氷瀑だ。  
落口上にも、10m程の棚状の滝とトイ状の滝  
が続く。両方とも緩氷してあらず、右の  
急な草付を登っていくと山道に出た。

コーヒーを淹かしてのみ、ゆっくりする。上  
部は日当りのよい河原がつつき、(これが  
滝を結氷しにくくしているのかもしれない)  
之股となる。右のものを、膝下ぐらいの雪  
をかきあげていくが、道を失い、もどる  
ことになる。

左股の稜には、地図には認められない。  
もっもっとした露岩帯かのぞめ、面白そ  
うだ。又、帰りのバスより、猪狩山北面の  
沢に1氷瀑を認めた。

洪水川 あから濁りて 流れたり  
地より虹は おまたちにけり  
(夕暮)

8136

栗原城・雨倉山～大渚山

- ・1982年3月12日～14日
- ・青谷知己・松本哲郎

世の中は、山スキーブームであるらしい。そのブ  
ームにのるようぢやないのだが、前々から始め  
たいと思っていた、山スキーを始めることにし  
た。これに、去年森下、青谷が途中まで登っ  
た雨倉の岩稜をつけ加えることにした。

3月12日 (晴後曇)

小谷温泉 8:00～林道分岐 10:00～  
1500m ヒーク 13:45

小谷温泉の旅館の裏から少し登り、平坦  
になったところで、スキーを付ける。天気は  
よく、雪はよくしまっているが、それでもス  
キーを付けたほうが楽に進める。去年、大  
雪のラッセルで1日目の幕営地にした所

まで、1時間半程づついてしまう。さらに雪  
平原を横切り、1500mヒークにつき上る沢  
を登ってゆく。シールが濡らうためか、青谷が  
登れる傾斜でも松本はすべってしまう。  
登れない。おまけに、一旦すべりだすと、か  
か上がものだから、実にみっともなく、い  
たっと倒れてしまう。散々苦労して、やっとの  
ことで、1500mヒークに上がり、テントを張る。  
青谷は、クライミング、サポーターなるものを付け、  
快楽そうであった。

3月13日 (曇後みぞれ)

発 5:25～P<sub>2</sub> 6:45～雨倉山 9:00～  
帰幕 10:55～発 11:50～林道 14:20～湯峠  
16:35

スキーはテントにおいたまま、雨倉のアタ  
ックに出る。上がるにつれ、ガスで視界がな  
くなる。岩場はザイル2p、ナイフリッジ2p  
で頂上だ。両側は、フンドシ、前沢奥壁  
で切れおちているようだが、何もみえず、高  
度感がまったくない。下りは、登ってきた道  
を懸垂をまじえ、かけ下る。

さて、いよいよスキーで滑降であると意  
気込んで出発したのはいいが、荷が重いのと、  
雪が重いので、まったく思うようにすべれ  
ない。ゲレンデの華麗な技術の片鱗さえ  
出すことができない。それでも、極づり制動  
が有効なことを見つけ、こぼしながらも、あ  
りてゆく。

稜線づたいに行くことはあきらめ、少  
し遠まわりになるが、一度林道へ出て、鐘  
池経由で行くことにする。天気はくすね  
て、雨まじりのみぞれとなり、視界のまった  
くない中を林道の切りひらきをたよりに、ど  
うにか、湯峠にたどりつく。

3月14日 (快晴)

発 6:30～大渚山 8:30～林道 11:05～  
姫川温泉 16:00

天気は快晴、気温も下がり、雪はク  
ラストしている。大渚山までスキーを背負  
うが、右にこれから滑走する真白な大雪  
原が輝き、重いスキーも苦にならない。  
大渚山からは、ヒアルパスはもちろん、



明屋山や日本海。その先には能登半島らしきものまで見える。ゆっくりと展望を楽しんだ後、滑降にうつる。初めは、急斜面のため、斜滑降にキックターンで、伐採後の大斜面に出てからは、谷まわりもまじえて快適に滑る。1時間半程で、林道が橋をわたる所へとび出した。それから、横川まではスキーをつけたまま、その後は除雪のためスキーを背負って、林道をひたすら歩いた後、温泉で汗を流し、夜行電車にのりこんだ。

僕には初めての山スキーで、いろいろなれなくて苦労もしたが、山スキーの楽しさも充分味わえた山行であった。(松本記)

8137

上越 大源太山東面コブ岩尾根

- ・ 1982年3月22日
- ・ 森下道夫、青谷知己

清水4:00 ~ 丸沢出合6:00 ~ 尾根取付7:00 ~ 大源太山頂上15:40 ~ 最低コル16:30 ~ デボ地17:20 ~ 清水19:40

コブ岩尾根は、2月初旬に悪天のため取付で引返している。アプロ今にスキーを使えば、日帰りも可能と思われたので、今回実行に移してみた。

夜行からタクシーと乗りつき清水(4:00)。ヘッドランプをつけ、スキーで登川右岸の林道をたどる。雪崩あとのトラバースに冷汗をかき、丸沢出合6:00、天気は快晴、輝くコブ岩尾根を仰ぎつつ雪原となった丸沢をたどる。

尾根の基部にスキーをデボし、大島の沢側から取付く。急な灌木帯の雪壁を直上していくと、しばらくで尾根らしくなる。雪底に気をつけながら、快適な雪稜をいく。トサカ状の岩峰、II峰手前より尾根がやせ、不安定な雪稜となる。時期がやや遅いため、崩れそうなシュレンドに気をつけながら、ツギをたよりに登る。危険を感じザイルをつけるが、気のぬけないうすっパリ切れた、ナイフエッジ

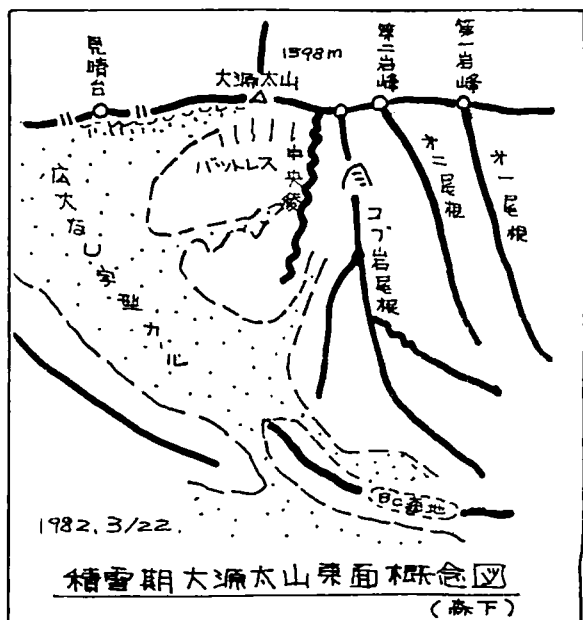
が続き、緊張させられる。6P程でIV峰手前のゆるい台地に出る。

コンティニアスで1Pたどり、IV峰は急な雪壁より、右のリッジに出て2P。コブ岩のコルまで更にナイフリッジを1Pたどる。コブ岩は、左手の急なブッシュの多い雪壁を登り、2Pで頂に抜け出た。周囲は急な雪壁となって落ちこみ、高度感が素晴らしい。更に緊張を強いられるナイフリッジを2Pでようやく稜線に抜け出る。(15:00)稜線も細い雪稜と化しており、大源太山頂まで更に4P伸びず。山頂も狭いナイフリッジだ。(15:40)

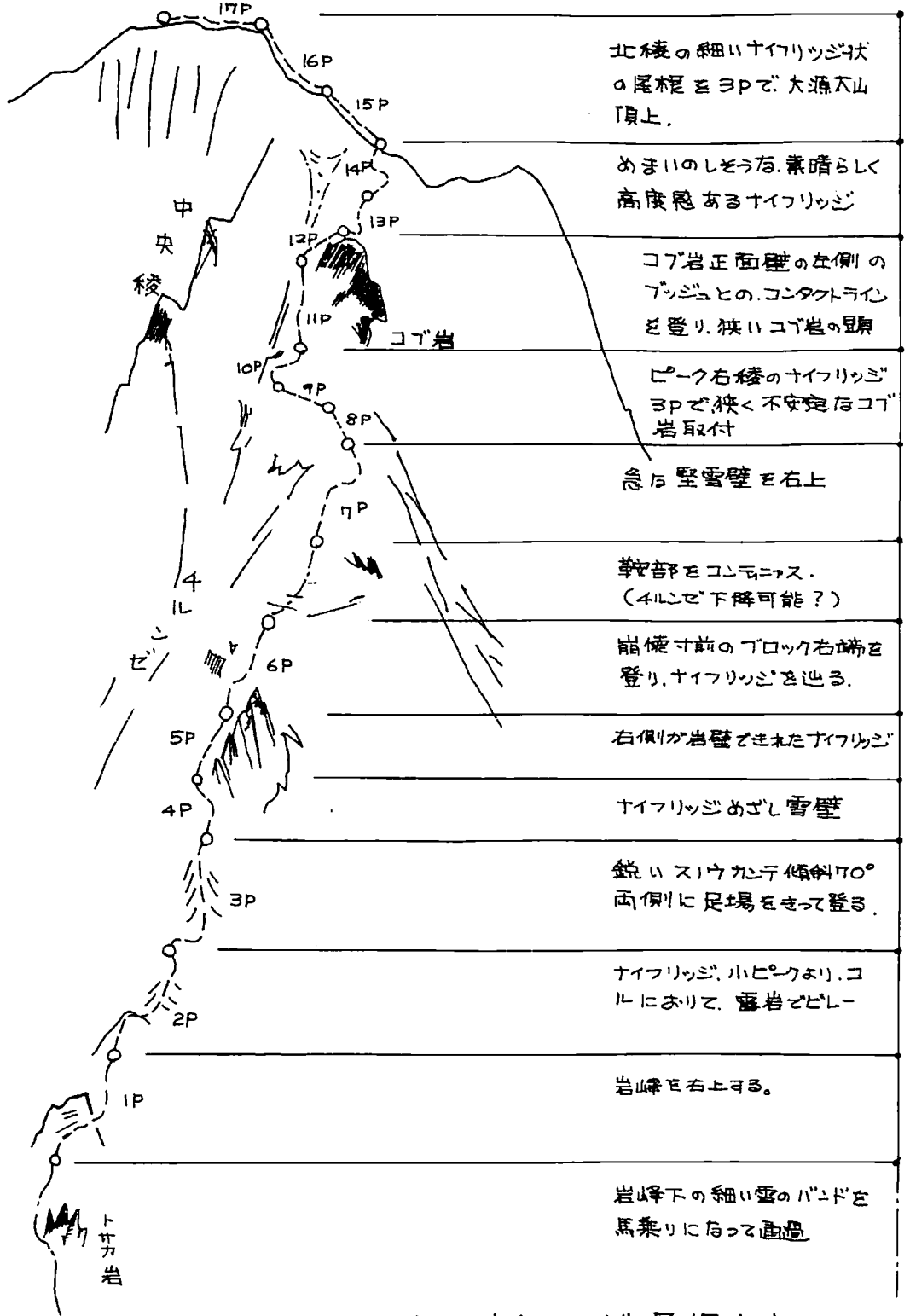
時間も遅く、すぐ下山に移る。コブ岩尾根を下る予定だったが、とても無理なので、大島の沢を下降する。雪崩も落ち切ったようなので、最低コルより、一気に急斜面を駆け下る。途中見上げる、大源太東面の岩場は、北岳バットレスを思わせる迫力だ。

スキーデボ地点(17:20)、夕闇のせまる中スキーを快適にすべらせ、登川の河原浴いにとどり、清水着19:40。

3月に入って、積雪があまりなく、ナイフリッジが崩れかけている部分もあり、頂上まで気のぬけない登攀だった。しかしスケールのある大きな雪稜であり、充実した1日だった。もう少し時期が早いほうが、状態はいいかもしれない。(青谷記)



大源太山 1598 m



北稜の細いナイフリッジ状の尾根を3Pで大源太山頂上.

めまいのしぞうな. 素晴らしく高度感あるナイフリッジ

コゴ岩正面壁の左側のフジとコンタクトラインを登り. 狭いコゴ岩の顕

ピーク右稜のナイフリッジ3Pで狭く不安定なコゴ岩取付

急な壁雪壁を右上

鞍部をコンテナス.  
(4Lにせ下降可能?)

崩壊寸前のブロック右端を登り. ナイフリッジを辿る.

右側が岩壁でできたナイフリッジ

ナイフリッジめざし雪壁

鋭いスノウカンテ傾斜70°  
両側に足場をきって登る.

ナイフリッジ. 小ピークあり. コルにありて. 露岩でビレー

岩峰を右上する.

岩峰下の細い雪のバンドを馬乗りになって通過

上越大源太山東面コゴ岩尾根上部

1982.3.22 (作図森下)

8138

西上44・大塩沢川源流～毛無岩

・ 1982年 3月28日

・ 森下道天

かおいた山、ヤブの尾根、その落葉の道をかきこぞと音もたて、歩いてみたくなって、鹿岳を右にのぞむ。大塩沢川源流左股周辺より稜線にでて、それは「荒船山まで行こう」という計画をたててみた。

稜線の三角点、1167.7mの南面に展開する、大塩沢川左股源流の900m～1000mラインの断層地形に期待をもったのだが、実際は水流は認められず、すまじらしい柱状節理状の岩壁であった。しかたなく、右の尾根にルートをとリ、胸壁のような急な所を、落葉はらい露岩を登っていくと、三角点にでた。遠く荒船山に白いものがみえる。

西走する尾根を足どりがちやかに行くと、吹きぬけていく風が、話しかけてくるようだ。尾根は、黒滝山～荒船山とつなぐコースとして歩かれているようで、しかりしている。地固にない峠道などに喜びながらいくと、断崖の毛無岩が立ちふさぐ。がけの3/4の急な登山道を登り頭にした。昼食もそこそこに、あっけない岩稜をあとにする。

午後のけだるい気分がただよい、荒船山にまじぎをじて、道場への道を下る。途中、見上げる毛無岩は、ノッパリしたフェイスで、なかなかユネラスな格好をしており、ほほえましかった。

きこともよいことだと思ふ。つまりところ、会員各々が自分の満足するところの活動をしてもらえばよいのだが、その交流する所が、会においては少ないように僕には思える。

5月、大兜山周辺、8月朝日連峰の山行は、合宿らしい意義ある山行が行なえたと思うが、積雪期はせつぱりまとまらず、散発の山行となった。

例会は、月2回、主に萩窪区民センター、カモニカスポール(高田馬場)にて行なった。出席する者も、多い時ど5、6名、少いと、2、3名という時が往々であった。例会は会務の伝達を中心であり、この場で山行計画、山行報告もなされるのだから、今の会の状況をものがたっている。例会を、実り多い場にするのが、会の急務だと思う。

会報は、1979、1980年の記録を主に「西高20号」を、6月1日発行した。「山と溪谷」531号にて、紹介された。続いて、21号を発行する。

会計は、会員より年会費3000円を、集め、若干の共同経費の購入、会報製作経費、遭難予備金等にあてた。会費の徴収はスムーズに行なわれず、不明朗な部分がある。

会員については、西高31期 四宮健三君が人会した。

西高WV部指導は、係の松本を中心に、学生会員に動いてもらい、無事一年すまることができた。

1981年度 会務報告

(森下)

1981年度山行計画については、年度の目標を、月1回の会山行を実施し、多くの会員の参加を募るということにおいたが、リーグ会のカ不足、根気の無さで、成果が上らなかった。

会員数も百にたんとし、今一度、会とはなにか、会員とはなにかを考え直してみ

- |     |                        |
|-----|------------------------|
| 7月  | 北アイルパス<br>燕岳～檜ヶ岳～薬師岳縦走 |
| 12月 | 武尊オリンピックスキー合宿          |
| 3月  | 南アイルパス<br>光岳～上河内岳      |

芙蓉樓送辛漸

寒 雨 連 江 夜 入 吳  
平 明 送 客 楚 山 孤  
洛 陽 親 友 如 相 問  
一 片 冰 心 在 玉 壺

(王昌齡)

西明登高会会報 「西明」 21号

編纂者 森下道夫

発行者 西明登高会 (〒182 調布市国領7-15-12  
山野裕方 )

1982年 8月 1日 100部発行